

---

# 海原の彼方

まめご

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

海原の彼方

### 【Nコード】

N1459R

### 【作者名】

まめご

### 【あらすじ】

新米国王の少女リウヒは、海賊の兄に浚われ気がつけば大海原のど真ん中に。逃げ出すことも抵抗することも叶わない中、次第に兄の狂気にがんじがらめになってゆく。助けてくれたのは一人の青年だった。

ティエンランシリーズ第二巻。 T I I N A M Iより転載作品、一部改稿。



## 葬式

口元に笑みを浮かべているその顔は、まるで寝ているようであった。カガミの遺体に、黒色の布が被せられる。健康そうだった赤ら顔は白く、愛嬌のあった丸い体はすっかり痩せ細って、まるで別人みただ。

生きていてほしかったのに。

リウヒは涙を拭いもせずに、かつての歴史教師を見下ろしていた。滴り落ちる水滴は頬を伝い、ハタハタと音をたてて、衣へ吸い込まれてゆく。

もつと色々、教えてほしかったのに。

自分の後ろには、トモキ、シラギ、カグラ、マイム、キャラのかつて旅をした面々がいる。

みな沈痛な面持ちで、リウヒと同じく死者を悼む黒の衣を纏ってカガミを見ていた。

キャラの嗚咽が聞こえた。トモキの押し殺すような声もする。

わたしに、外の世界をみせてくれた。それは、掛け替えのない仲間と大切なものを気づかせてくれた。

「陛下」

涙に濡れたトモキの声が聞こえた。

数歩引くとカガミの亡骸は棺へと納められ、男たちに担がれた。

もう、あの顔が見られない。

棺はゆつくりと進み出す。その後ろにリウヒたちが続く。静かな殿中を、数人の足音だけが響き渡る。

これから、あの男は地中へと埋められる。そして魂は西の果てへと飛んでゆく。

全てが悪い冗談のように思えた。実はあの遺体は幻で、棺の中から昔の丸々としたカガミが起き上がって

「えへへ、生き返っちゃった」

とか頭をかきながら出てくるような気がする。

そう思つて目の前をゆく黒い棺を凝視したが、勿論そんな奇蹟は起こらなかった。

小西門下まで来ると、外は雨がふっていた。遠くでかすかに雷の低い唸り声がする。

これ以上の同行は無理だ。

宮廷の外へと去つてゆくカガミの姿を門内から見送る。

さようなら。

小さくなつてゆく棺にリウヒは心の中で別れを告げた。

さようなら、愛すべきタヌキオヤジ。

シラギの部屋に集つたみなは、黙つて酒を飲み始めた。酒瓶が回される。

死者を悼む時も酒か、とリウヒは呆れたが、我々を酒飲みに育て上げたのはあのタヌキだ、きっと喜んでいるに違いないと丸めこまれて納得した。

リウヒの前には、とてつもなく薄く割つた果実酒が置かれている。

もう、十七になつたのに、成人したのに子供扱いか。キヤラでさえみんなと同じ酒を飲んでいるのに、と文句を言ったら、リウヒは酒にめっぽう弱いんだから、と諷められた。

「あんた祝宴の時、酔っぱらつて寝ていたでしょう。祝祷の舞も見ずに。あたしの努力を無駄にして……」

マイムが怒りの顔で睨んでくる。何度聞かされたか分からない文句に慌てて耳を塞いだ。

「リウヒさま、酷い顔をしていますよ」

せめて鼻水ぐらいは拭ってください、とトモキから小布を渡される。酷い顔とはなんだ、失敬な。思いつきり鼻をかんでやった。

「結局、真実を語りませんでしたね」

依然、ジュズとタイキの行方は知れない。カガミも口をつぐんだまま、去つて行つてしまった。

「きつと、またぼくらの前に姿を現してくれますよ」

カガミの魂は西の果てにゆき、また東から生まれてくる。

ティエンランは天、すなわち太陽を神としていた。死んだ人間の魂は、太陽と共に西の果てへと沈み、前世と同じ姿形をして、東の果てから新しく生まれてくると信じられていた。

輪廻転生を当たり前に考えていたのである。

「だれかの子供として生まれ変わったたりしてね」

「小さい時からあの頭だったりして」

リウヒの言葉にみな小さく笑った。

「愛すべきタヌキに」

追悼と再会の願いを込めて。

それぞれが酒を掲げる。リウヒも西国渡りのグラスを持ち上げた。

外は相変わらず小雨が降っている。

絶え間なく、しかし柔らかに降り注ぐ雨は静かに草木を濡らしていた。

## 花見

柔らかな風に吹かれて花びらが舞散る。

「ああ、幸せ」

リウヒが目を細めて言うのと、みなが笑った。

今日は政務もない。リウヒが王になってから半年、激務が続いた。本人は休みをくれとブイブイ文句を言ったり、先王はよく遊んでいられたな、と羨ましがっていたが、仕事は後から後からわいてくる。ようやく一段落して宰相からお許しが出た時、リウヒは喜々としてみなで花見がしたいと言った。かつての仲間たちと、空中庭園でのんびり過ごしたいと。

微笑ましいおねだりに、宰相と大老たちは相好をくずした。

そんな訳で、カグラはあの愉快的仲間たちと共に花散る桜の下にいる。マイムは月琴を優雅に奏で、その横でトモキが茶をついでいる。隣にはシラギとリウヒが、座って酒や茶を飲んでいる。遠くで国王付きに昇格した、リウヒ付きの三人娘が控えている。

絶え間なく舞い落ちる花びらが、小さな国王の藍色の髪や、友人の黒い衣を彩っていた。

惜しむべきは、カガミとキャラがいないことだ。

カガミにはもう会えない。父は西へと旅立ってしまった。

「キャラもきてほしかったのに」

「女官長の許しがもらえなかったとかで、本人もふてくされてしまったよ」

トモキが笑う。

「あ、でも、伝言を預かってきました」

「なんと言っていたのです」

「えーっと、あたしをのけものにして許さない。絶対、国王付きの女官になってやるんだから。覚悟してなさい」

「……それは伝言というより、宣戦布告だな」

まったくキャラらしい、トリウヒがクスクス笑う。

「お寛ぎのところ失礼いたします、陛下」

臣下の一人が膝を折って礼をした。

「宮廷地図の製作で、難儀しておりまして、その、トモキさまにご指導頂きたいのですが、同行していただいてよろしいでしょうか」

「いいよ。いつておいで、トモキ」

トモキは笑って一礼すると、臣下と共に歩いて行った。

「いろんな所で頼られているのね」

マイムが感心するように眩き、ちらりとカグラを見た。

思わず苦笑をする。

新王直立後、宮廷海軍のあまりの情けなさに、アナンの船に乗っていたことのあるトモキを拉致同然にスザクへ連れて行き、リウヒに文句を言われた。

「そういえば、近頃よく食堂で一緒にいるのよ、キャラとトモキ」  
笑いを含んだ声にリウヒが顔を上げる。

「キャラは、トモキに会いたければかりについてきたようなものですかね」

「ええっ！ そうだったのか、まったく気が付かなかった」

素っ頓狂なリウヒの声に、シラギも頷く。

「わたしも、てっきり好奇心でついてきているとばかり」

「あんたら、天然？ 鈍感？」

馬鹿にしたようなその言葉に、国王と黒將軍は猛反発した。わたしはシラギよりましだ、いや、陛下の方がひどい、と言いあう二人にカグラは声を上げて笑う。

笑いながら春の陽気と酔いに任せ、胡坐から足をのばして、ごろりと寝そべった。

片手で頭を支えながら、猪口を口に運ぶ。

「お前、仮にも御前でそれは無礼だろう」

呆れるシラギに、国王陛下が笑いながら答える。

「よい、許す。今日は無礼講だ」

「ありがたき幸せ」

リウヒが微笑みながらカグラを見た。花びらがひとつ、ぴるぴると落ちて銀色の髪に着地する。

「カグラはなにをやっても様になるな」

「陛下もお美しくなられた」

目に力をこめて微笑しながら言う。

「まるで大輪の花が咲いたようです」

「陛下、その男に近づいてはなりません。呆けが移ります」

黒衣の友人が、少女を慌てて引つ張った。リウヒが均等バランスを崩して、その肩にもたれ掛かる。シラギが顔を赤らめるのが分かった。

と、彼方からバチがとんできてカグラの肘に当たった。

「あらやだ、ごめんなさい」

マイムが笑顔で、手を口に当てる。

「手が滑っちゃったわ」

ほほほ、と優雅に笑ったが、目は笑っていなかった。

「宮廷一の踊り子でも、手が滑ることがあるのですね。新人じゃあるまいし」

「そうねえ、時と場合によるわねえ」

バチをかえしながらマイムと無言で会話する。

こんな所で浮ついた事いつてんじゃないわよ。

嫉妬ですか。可愛い人だ。

馬鹿。この馬鹿。

しかし美人になったなとカグラは思う。元の位置に戻りながら、改めてリウヒを見やると、居心地がよかったのかシラギの肩に背をもたせかけながら、呑気に茶を啜っていた。

昔は取り立てて、特徴のない子だったのに。

ぶっくらぼうで色気のいの字もなかった。外の世界にいた時も、そこらの村娘たちとなんら変わりなかった。キャラの方がまだ目立っていたくらいだ。

ところがここ最近、生まれ変わったように美しくなった。緩やかに

纏められた藍色の髪は太陽を受けてたなびき、白い肌は髪と衣の色を引き立てる。体はほっそりとしなやかで、大人の色気と少女の危うさが同居しているような風情があった。身長が低いことすら愛らしい。臣下の中にも、うつとり見とれる者も少なくはなかった。そういうお年頃なのだろうか。

「陛下、そろそろどいてくれませんか。慎みというものを…」

「いいじゃないか、今日は無礼講だ」

苦りきった赤い顔と、安心するように男に寄りかかっている少女を肴に酒をすすする。

本当は嬉しいくせに。そろそろ自覚してもいいだろう、友人よ。

「こんな時間を過ごしていると、あの時に戻ったみたいだ」

リウヒが懐かしそうに遠くを見る。

「前、国務に疲れたら兄さまもいることだし、海を渡って逃げてやろうとトモキに言ったことがある」

「壮大な追いかけてこすな」

シラギは僅かな抵抗をやめたらしい。片手について酒を飲んでいる。その光景は、まるで父と娘が仲良く日向ぼっこをしているようだ。

「トモキは、ならばみんなで追いかけてやるから覚悟しておけと言った。不可能なのは分かっているけど、そうならとてつもなく楽しいだろうな」

かつての仲間と、海を渡って異国へ行く。また働いて賃金を稼いだり、酒場で騒いだり。

「兄さまの海賊船にも乗ってみたかった。ええとなんだっけ、海くらげ……」

「海蛸つみとかげですよ、陛下」

王の間違いを訂正しつつ、カグラは起き上がって杯を置いた。

「アナンさまはリウヒの直接のお兄さんじゃないのよね」

「うん、母が違う。わたしの産んだのはイズミだし、兄さまの母は西宮のナチ殿だ」

その返事に少女の複雑な心境が見て取れた。赤子の頃、気の触れた

実母に殺されそうになったリウヒは宰相の計らいで、田舎のトモキ宅に預けられた。そして連れ戻された宮廷では、今度は実の父親が夜な夜な寢室を訪れるようになった。

それ以外にもおぞましい噂をカグラは耳にしている。

「我が海軍も船を持っているではないか」

話の流れを変えるようにシラギが声を上げた。

「残念ながら、とても陛下にお乗りいただく段階までは整っておりません」

豊かな国、ティエンランの汚点、弱小海軍。

何て事はない、代々左將軍は海を統べる義務があるものの、お飾りの場合が多かった。

カグラだってそうだ。入廷した当初、その位を頂いたものの全く仕事をせずにシヨウギに侍っていた。あの時かすりでも義務をはたしていればと何度も後悔した。

船は中型船がたった二隻、小型船が六隻で、砲すら付いていない。トモキですら呆れていた。

「何ていうか……。その、がんばってください……」

セイリユケ原の戦時、どさくさにまぎれてアナンの大砲をがめておけば良かった。

人材も予算も、不足している。唯一頼りになるのは、ジャコウという中年の副將軍で、不足だらけの中で立派に任務に勤しんでいた。

「まったくの脳なしという訳ではないでしょう、何かこう、誇れるものはありませんか」

青白吐息のカグラがヤケクソ気味で聞くと、ジャコウはしばらく考えた挙句

「逃げ足ですか」

ぽつりと言った。

宮廷海軍の自慢が逃げ足でどうする、第一何から逃げている、と内心カグラは天を仰いだ、表面上は眉をしかめただけだった。

「本殿の修復ももう終わるし、なるだけ予算は海軍に回すようにす

るよ」

「お願いしますよ」

リウヒは笑って了承した。

風が吹いて花吹雪が舞いあがる。みな思わず感嘆してその風を受けた。

世界が薄桃色に染まり、まるで夢の中にいるように幻想的な風景。その隙間から見える遠く青い空。

日々は平和に過ぎてゆく。これからも、ゆるゆると過ぎて行くかのように思われた。

まさか、みなの大切なこの少女が、海原の彼方へ消えるとはこの時だれも想像すらしていなかった。

事件はある日突然、やってくるものだ。

## 海の上 1

突然、頭領がティエンランへ行くと言い出した。

あの騒ぎから半年、久しぶりのティエンラン上陸だ。

「けど、なんでいきなり」

「何か、忘れものをしたとかなんとか」

「なんじゃそりゃ」

目の前の親友も首をかしげている。

「お前、なんか知ってんじゃないの。頭領と同じ、元宮廷人だろ」

「やめろよ。おれも分かんねえよ」

とクロエは顔をしかめた。

キジは物心ついた時からこの海賊船に乗っていた。生まれた国も知らない。親兄弟もいない。

潮騒を子守唄に、波の揺れを揺籠にここで育ってきた。今じゃ若干二十一ながらりっぱに古株だ。

片や親友のクロエはピカピカの新人だ。半年前から船に乗っている。こいつとの出会いは今でも、まざまざと思い出すことができる。

ある日、名前を呼ばれて振り返ると、頭領と一人の少年がいた。高そうで上質な衣を着ていて、髪の毛は真っ黒、風にさらさらとなびいている。思わず自分のバサバサ頭に手をやってしまった。

目も黒色で、キジを興味津津といったように輝かせて見つめている。

「新入りだよ。色々教えてやってくれ」

「よろしく願います」

深々と頭を下げられ、びびった。

「お、おう……」

じゃ、頼んだよ。頭領は爽やかに笑うと少年を残して去って行ってしまった。

「お前、名前なんての？」

「はい、クロエと申します」

はきはきと少年が答える。

「いくつ？」

「二十です」

「同い年じゃねえか！ 十六くらいだと思っていた。」

「と、とりあえず案内するからよ……」

「はい、よろしくお願いいたします。キジさま！」

キジは思わずのけぞった。

「やめて！ なんかかゆいから、キジさまってゆうのはやめて！」

クロエはきよとした顔をしている。

船内を案内しながら色々な話をした。

貴族さまの息子みたいだと思っていたこの少年は、本当に貴族さまの息子だった。

名門の出で、血は王女派だったがアナンにつけられていたという。

そしてその人柄に魅せられてしまった。

「本当に大勢の中にも存在感があつて、誰にでも優しく、快達で懂れていたのです」

クロエはうつとりと語る。

うんうん、そうだな。おれたちの頭領だもの。

スザクの港で王女が接触してきた時、キジと仲間は衝撃の事実を知った。尊敬していた男がまさか、ティエンラン国の王位継承者だったとは。そして王位を選ばずに海と仲間たちを選んでくれたその男に、一層の敬愛の念を注ぐようになった。

「忘れられないのは、ある宴の時です」

そこで、クロエは小さな王女と話す王子を見た。

煌びやかな宮廷の中心で、藍色の髪を輝かせて幸せそうに笑う少女と、少女の前に片膝をついて、ほほ笑んでいる青年は一枚の絵画のように美しかった。

「その後ろで、得意げに鼻を膨らませている少年は目障りでしたが」お前も、その光景をみて鼻を膨らませていたんだろうよ。

「しかし、アナンさまは突然姿を消してしまいました。騒ぎがあつ

て、王女も消えた」

それからは色町上がりの女の天下になった。が、王女は生きていた。王子も生きていた。

二人は海賊と民衆を率いて国の為に反旗を翻した。

セイリユウケ原の戦いは、キジも参戦していたから知っている。それを言うと、クロエは本気でうらやましがった。

「セイリユウケ原の頭領と嬢ちゃんは、マジですごかったぞ。馬をバツと駆けてだな。あつという間に宮廷軍を蹴散らしていった。あいつら、怖がってすぐに嬢ちゃんにつくといいだしたんだ」

「ええと、嬢ちゃんって……」

「ああ、現国王。なんだったつけ、名前……」

「リウヒさまですか」

「そうそう、それだ」

頭領が気に入って協力した、勇ましい娘を仲間たちは親しみを込めて嬢ちゃんと呼んでいる。

妹は国王となった。兄は自分の居場所の海に帰っていった。

「アナンさまがここにいると知って、わたしは居ても経ってもいられずに、追って来てしまいました」

「へー。お前、見かけによらず突っ走るんだなあ」

キジは感心した。貴族さまというものはもつと軟弱だと思っていたのに。

「なあ、一つ頼みがあるんだが」

「はい、なんでしょう！」

背筋を伸ばして、笑顔で答えるクロエにキジは怒鳴った。

「そのしゃべり方を何とかしてくれ！ おれさあ、駄目なんだよ。そついうの！」

いきなりの剣幕に目を白黒させた少年だったが、真剣な顔して頷いた。

「分かりました。まず、何をすればよいのですか」

今、おれ、やめろって言ったよね？ はっきり言ったよね？

「自分のことは、わたしじゃなくて、おれと呼ぶように」

「……お・れ？」

「違あーう！ 発音が違う！」

キジの教育のおかげか、クロエは瞬く間にここでの生活になじんだ。いまでは無二の親友だ。共に酒を飲み、商船を襲い、嵐の中を走り回って、青空の下で笑い合った大切な親友。

「ティエンランなあ。あんまり好きじゃねんだよなあ」

酒も食いもんも、うまいけどさ。

「おれ好みの女、少ねえし」

「お前の好みが変なんだろ」

横でクロエが呆れたような声を出す。

キジが好む女は、みな一様に太っていて年上だった。

だってしょーがねえじゃん、好きなんだもの。

「変なのはクロエの方だ。陸に上がっても、女抱かねえし。ものすごく言い寄られる癖に」

美少年にほんのちよっぴり羨みを足したクロエの容貌は、女にとにかくもてた。

いいよな、男前は。おれなんて頭、橙色でばさばさだし、顔はそばかすだらけだし、やせぎすだし、三白眼だし。と拗ねなくなるくらいもてた。しかし、当の本人は。

「面倒くさいんだ、そういうの。宮廷では、まあ色々あったけど、女の人って暇だから恋愛しかすることなくてさ、何かうるさいんだよな。キャンキャンと」

お前、それ女に喧嘩売ってんのか。売ってんだな。

「キジと一緒にいた方が楽しいし」

キジは勢いよくクロエから離れた。

「おっおれはそういう趣味ねえぞ！」

「ああ、そういう意味じゃなくて」

「なんだよ、まぎらわしい。勘違いするような発言するな馬鹿」

\*\*\*

奇妙な感覚に、リウヒは目を覚ました。ゆっくり傾いていると思っ  
たら、また逆に傾ぐ。

ここはどこだ。見慣れない天井。見たことのない室内。

緞帳のかかる寝台に自分は寝ている。身を起して寝台から降りると、  
足取りがフラフラした。慌てて、机の端を掴む。

卓上の上には、地図や見たことのない小道具が散乱している。

その後ろに窓があった。覗き込むと遠く海原が見えた。  
海の上。なんで？

昨夜、寝たのはいつもの自分の寝室だ。それは覚えている。

もしかして、わたしは夢を見ているのだろうか。花見をしていた時  
に、こんな話がでたし。じゃあ、どうして一人でいるのだろうか。ト  
モキは？ みんなは？ 後から追いかけてくるのか？

床が音をたてて傾ぐ。リウヒはへたり込んで、机にもたれた。

その時、扉が開いた。入ってきたのは

「気が付いたんだね」

「兄さま！」

異母兄弟の兄だった。王となるときに助けてくれた、赤茶けた髪の、  
翡翠色の瞳をもつ自慢の兄。いつも朗らかで、頼りになる大好きな  
兄。

不安は一気に晴れた。おぼつかない足取りで、フラフラと兄によっ  
てその手を掴む。

「お久しぶりです、お元気でした？」

「君も元気そうだね」

アナンは笑って、リウヒの頬を包み込むように撫でる。

「そして美しくなった」

兄にそう言われるのは嬉しい。はにかむようにリウヒは笑った。

「薬が効きすぎたようで、目を覚まさないからどうしようかと思っただけ」

さわやかに笑ったまま、頬を愛おしげに撫でている。

「覚ましてくれてよかった。しかし、宮廷の警備は緩いね。もっと厳重にした方がいいよ」

リウヒは、ぽかんとした。

何をいつているのだろう、この人は。

「兄さま、これは夢じゃないの」

夢だろう。みんな後から来てくれるはずだ。

「わたしの妹は、可愛い事をいう」

そのまま、近づいて頬に口を寄せた。不安が心の中を満ちるように引き返してくる。

「やめて、兄さま。どうしてわたしはここにいるの」

「わたしが浚ってきたからだよ」

何をいつているのだろう、この人は。理解ができない。

「そんな、戯れはよしてください。本当の事を言って」

「やれやれ、わたしは本当の事しか言わないのに」

兄は妹の手を握ったまま、片膝についてその下から覗きこんだ。かつて宮廷の宴で初めて声をかけてきてくれた時のように。港はずれの一軒家で、自分に協力してくれた時のように。

その深緑の瞳に吸い込まれそうになる。

「あの上位の礼はとても美しかった」

アナンの手が、再び妹の頬を撫でた。嫌がるようにリウヒが身をよじる。

全く気にせず、兄は続けた。

「君たちと別れてから、わたしはわたしの日常に戻ったよ」

細い両手を掴む。そして片手に閉じ込めた。

「でも世界は以前よりも輝かなくなっただけ」

兄のもう一つの手は頬からゆっくりと下がっていく。冷汗が背を伝った。

何をしているのだろう、この人は。

「愛する妹がいなくなったからね」

唇を、指の腹でゆっくり撫でられた。背中を無数の虫が這っているように気持ち悪い。

「最初は気が付かなかったよ、まさか妹に心奪われているとは思ってもしなかったから」

手が腰に回った。思考が全く回転せず、リウヒはただ硬直しているだけである。

「どんな女を抱いても、この虚しさは消えなかった」

首筋を舐められた。もがいても兄の手は緩まない。

何をしているのだろう、この人は。

「ところがどうだろう、君がいるだけでわたしの世界はキラキラと輝く」

クスクスと楽しそうに笑う。

「愛する妹は国王となってしまったが、それでも欲しかった」

兄は逞しい腕で、妹の細い体を抱きしめた。悪寒が背中を一気に駆け抜けた。

「わたしの可愛い妹を、この手の中に」

何をいつているのだ、この人は！

「離して！」

思いつきり突っぱねても、兄は腕に力を込めるばかりだ。

「戯れはよして、ふざけた事をいわないで！ わたしはあそこへ帰らなければ、いけないんです。やるべきこともあるし、心配している人も……」

国を預かる身として、仕事は山ほどある。そうでなくとも、過保護で心配性な人たちなのだ。今頃、トモキや宰相を筆頭に大騒ぎしているに違いない。

「それはトモキくんかい」

その顔は笑っていたが、目は恐ろしいほど静かだった。

「黒將軍か。それとも白將軍かな」

そのまま抱きあげようとする。リウヒは転がるように兄から離れると、扉へと走った。

取手を回しても開かない。鍵がかかっているようだ。それでもガチャガチャと回し、腹立ちまぎれに扉を叩いた。

「外に出てもいいけどね」

アナンがクスクスわらったまま、近づいてくる。

「無駄だよ。海の上だから、どこにも逃げ場はない」

鍵が開けられる。音をたてて扉を開け、リウヒは外へ飛び出した。

\*\*\*

いきなり、大きな音がした。

キジが驚いてその方向をみると、やせつぼちのチビが一人、頭領の部屋から転がり出るように、飛び出してきた。

あれは嬢ちゃんじゃねえか。

二日前ティエンランに降りた頭領は、一人どこかへ行き、ぐったりした娘を担いで帰ってきた。そしてさっさと故郷から離れてしまった。

その時は気に入った女を連れてきたのだろうと思っていた。しかし甲板を狼狽したように、蹴躓きながら走りまわっている少女は、たしかに頭領の妹で国の王さまだ。

「あの子……」

隣でクロエが呆然としたように、少女を眺めていた。

「リウヒさまだ」

「知ってるの？まあ、知ってるよな」

「いや、何度かしか見たことなかったし……。でも何で……ここに  
いるんだ」

少女は走りまわるのをやめ、一点をじっと見つめている。その先にあるのはうつすら見える陸地だ。

それ、ティエンランじゃあねえぞ。アスタガだぞ。

しかし、その子はおもむろに足を上げて舷側の手すりによじ登ろうとした。

「あっ！」

クロエが声を上げる。

「やめなさい、リウヒ。危ないじゃないか」

頭領が軽々と抱きかかえる。少女は身を突っぱねて暴れた。

「大人しくしなさい、海に落ちるよ」

「謝れ！」

少女の絶叫が響く。他の仲間も何事かとあっけにとられている。

「我が国とわたしに謝れ！　そして即刻、国に戻せ！」

「ああ、わたしの妹はなんて勇ましい」

頭領はうるたえた様子もなく、未だ暴れる娘を腕に閉じ込めたまま、部屋へ戻って行ってしまった。

「なんじゃ、ありゃあ」

「頭領は妹をかつさらってきたんか？」

「しかも王さまだろ、あの子」

仲間の声がする。

「おい、クロエ。仕事に戻ろうぜ」

「あ…ああ。うん」

横で、クロエが呆けたように立っている。その顔を見てキジは一抹の不安を覚えた。

## 海の上 2

リウヒは果てしなく続く海原を眺めながら、一人舳先で風に吹かれている。

この船に乗って、どれほど経ったのだろう。早くティエンランに帰らなければ、わたしはこんなところでぼんやりしている場合じゃないのに。

息を吐いて、彼方を見る。

思いつく限りの抵抗はした。が、兄には敵わなかった。

怒りにまかせて物をやたら滅多らに投げつければ、あつという間に捕獲され、数日間縄で縛られた。

食事を拒否すれば、口移しで食わされる。

至近距離から頭突きをくらわしたはいいが、効果はなかった。むしろ自分が痛みのあまり転げまわった。

船底に隠れようとして、その度に海賊に見つかって追い返された。

「嬢ちゃん、駄目だよ。部屋にお帰り」

海に落ちれば何とかなるかも、と手すりに足をかけても、誰かしらに見つかって引き戻される。海賊たちは兄を尊敬し、恐れている。

味方は誰もいない。

部屋にあった剣で襲いかかったこともある。アナンはさすがに驚いたものの、あっさりかわし、剣をたたき落とした。

「危ないじゃないか、こんなものを振り回しちゃあ」

悔しさといら立ちのあまり、涙が出てくる。

「あなたはわたしの兄さまなのに。血が繋がって…」

「そうだよ、まったくその通りだ」

アナンは落ちている剣を拾って、リウヒの腕を取った。恐怖に腕をひっこめようとしてもびくともしない。

「それでも、横にいてほしいんだ」

そして、妹の細い腕に刃をあてて、ゆっくり引く。

「痛っ……」

「ごらん、リウヒ。私たちには、同じ血が流れている。好欲な老人の汚らしい血がね」

白い肌に赤い線が一直線に走り、そこから血がぷつぷつとわき出した。幾筋にもなつて流れてゆく。

「ああ、なんて美しい。まるで雪野にさく赤い花のようだ」

うつとりと兄は呟くと、腕に舌を這わせて血をすくい取ってゆく。

おぞましさに震え、力をいれて振り切ろうとすると、それ以上に強い力で抱きあげられる。

「兄さま、聞いて！」

腕の中でもがきながらリウヒが叫んだ。

「わたしは民の前で上意の礼をした時、誓ったのです、この身に变えても我が国と民を守ると！だから……！」

「立派な心がけだね」

そのまま寝台に投げ出された。

「だがわたしには関係ない」

兄に全てを奪われても、宮に帰リたかった。国の事は気が急くほど気になったし、なによりみんなに会いたい。

トモキはものすごく心配しているだろう。早く帰って安心してもらわないと。

リウヒは袖口からのぞく赤い宝玉にそつと触れた。

——陛下がいつまでも健やかでありますように。鳳凰のご加護がありますように。

そう言つてトモキはリウヒの腕にこの腕輪を巻いてくれた。宝玉の中にはティエンランの王紋、鳳凰が優雅に舞っている。手を掲げると、取り巻いている金の鎖がサラサラと揺れた。

——ありがとう、トモキ。国の主として恥じぬよう、精一杯努めるよ。

トモキだけではない、宰相、以下重鎮たちはどういう行動に出ているだろう。そしてシラギたちは……。

違う違う、これは夢なんだ。だから、みんな早く来て。一緒に外を旅しよう。夢なんだから、カガミもくるはずだ。早く会いたい、早く…。

兄にあんなことをされるのは、何かの間違いだ。みんながきたら、この悪夢は消えてしまうに違いない。そして楽しい旅が始まるに違いない。だから、早く来て。

風に髪をなびかせながら、リウヒはひっそりと涙を流した。

\*\*\*

舳先で、藍色の髪がなびいている。

クロエは迷いながら近づいた。仲間たちは、この少女にどう対応して良いのかわからないのだろう、誰も声をかけない。

一人でぼんやりと遠くを見ている後ろ姿はとても淋しそうで、同情心が沸いた。

「リウヒさま」

思い切って声をかけてみる。

すると少女は驚いたように振り返った。涙でぬれたその顔が、歓喜に輝く。

心臓が跳ねた。なんてきれいな…。

「始めまして、この船に乗っているクロエと申す者です」

「あ……」

少女の笑顔はみるみる内にしぼんで、目を下に落とした。

うわあ、おれ、何か変な事いったかなあ。

「あのっ、もともとは宮廷にいたんです。アナンさまの近くにいたくて、ここにきてしまいました。えっと、シラギさまってご存知ですか」

「知っているも何も」

そう言って少女は小さく笑った。

「昔、一緒に旅をした」

「あつそうだったんですか。実は、おれ…じゃなくてわたし、シラギさまの又従弟なんです」

「ああ…」

似ている。とリウヒが笑う。自分をまじまじと見る瞳が熱を帯びているようで、いつそう心臓がはね回る。なんだろう、切ないような気持ちになってきた。

「本人をもっと若くして、背を縮めて、柔らかくした感じだな」

「よく言われます」

「よろしく」

リウヒが手を差し伸べた。白く細い腕で、赤い線が一本入っていた。その手を取ると、ひんやり冷たかった。しばらく握っていたが離し難くなってしまった。目の前の少女は、不思議そうにクロエを見ている。自分の手の中に包まれている、小さな白い手。

ずっとこのまま握っていたい。

「あの…」

戸惑ったような声に顔を上げると、リウヒは手をひっこめようとした。思わず力を入れてそれを拒む。

「ええと…」

どうしてだろう、どうしておれはこの手を離せないのだろう。風が強く吹いて二人の髪を浚った。波の音が漂うだけで世界に自分とこの少女の二人しかない錯覚に陥る。

その時、遠くからアナンの声が聞こえた。リウヒを呼んでいる。力を緩めると、少女はクロエに一瞥もくれず、フラフラと兄の元へ歩いて行った。

「おいで。リウヒ。湯浴みの時間だよ」

アナンは妹を抱き上げ、そのまま部屋に消える。

しばらく無言でクロエはその二人が消えた扉を見つめていた。

\*\*\*\*\*

触先にいるクロエにすたすたと歩いて行くと、キジはその頭を思い切りはたいた。

「痛え！ 何するんだよ！」

「馬鹿！ この馬鹿！」

頭を押さえて睨みつける親友を今度は蹴りつける。

「全部見てたぞ。お前、何考えてんだ。嬢ちゃんは頭領の大切な人なんだぞ。それにちよっかい出しやがって！」

「そんなんじゃないよ！」

クロエが噛みつく様に応じた。

「じゃあ、なんなんだよ」

「…わかんねえ…」

しょんぼりと頭領と娘が消えた扉を見つめる。こいつ、もしかしてキジはその顔をみて慄然とした。もしかして、あの子に惚れてしまったんじゃないの？

思わず頭を抱える。この男は突っ走る傾向が強い。非常に強い。下手に暴走して、頭領にばれたら半殺しじゃすまない。殺されるかもしれない。

「なんか、さびしそうで守ってやらなきゃって気になって…」

クロエがぼんやりとしながら、自分の手を見る。

「あの白い手を離せなかったんだ」

馬鹿！ もっと相手を選んで恋愛しろ！

「なんだろう、この気持ち…」

その顔は、完全に恋している顔だった。

「誰か！ 誰かこの馬鹿に付ける薬をくださいーい！」

キジの絶叫が青空に木霊した。

\*\*\*\*\*

滴り落ちる水滴は玉になって、白い肌をころころと転がってゆく。幾度、湯をかけてもリウヒの肌はそれをはじいた。浅い桶に湯を張って、何度も肩にかけてゆく。室内には花の香りが漂っていた。香を練りこんだ糠袋の香りだ。

妹はなすがままになっていく。最近やつと大人しくなった。

ここに来た当初は、暴れたり、逃げだしたり抵抗していた。まるで子供が癇癪を起しているみたいに、微笑ましい抵抗。それすらも欲情を起こさせることに、この子は気が付いていなかったのだろうか。白い肌がうつすら薄桃色に染まってきた。肩に手を這わすと、かすかに身じろぎをする。

上に結いあげた髪の間隙から見えるうなじも、この小さな肩も、慎ましい胸もすべてが愛おしい。

「ああ、なんて美しいんだ、わたしの妹は」

うなじに舌を這わせると、耳を甘噛みした。妹は体を固くしている。本当に、この子は美しくなった。昔はただ可愛らしいだけだったのに。

初めて宮廷で声をかけた時、妹は一瞬怯え、気合を入れたように踏ん張って笑顔で挨拶をした。次に会った時は、自分の代わりに王になると宣言し、暴走しようとした。

上意の礼を感嘆するほど見事にやってのけた妹は、しかし結局はそれだけの存在だった。

そう思っていたのに。

別れてから、リウヒの事が頭を離れなくなった。どんな女を抱いても、頭を中心に居座って笑っている。兄さま、と可愛い声で呼んでいる。

その内、無性に欲しくなった。あの老人の異常な血を引いているからだろうか。

王子として宮廷にいた時、全てが膿んでいた。周りの望むよう快達を装って、明るく陽気な人格を演じていた。そうしている自分をひ

どく嫌悪していた。

与えられた地位も、宛がわれた婚約者も、約束された王の座も、全てが嫌で狂いそうだった。限界が近づいていた時、歴史の講師から声をかけられた。

「外の世界を見てみないかい」

その時感じた、圧倒的な開放感。まるで水面から顔を出す時のような。

宮廷に帰る事は、死に行くようなものだった。そのまま出奔して自分の居場所を見つけた。

王子時代の、抑圧された生活の反動があるかもしれない。無性に手にいれたくなつた妹を浚った。簡単な事だ。生まれ育つた後宮は、隅々まで知り尽くしている。

始めは数日間、共に過ごしたら帰そうと思っていた。この子は国王なのだ。自分が投げだした義務を引き受けてくれた。

だけど、もう無理だ。国王だろうが、血が繋がっていいようが、関係ない。

この娘は、わたしのものだ。やっと手に入れたかわいい妹を、誰が手放すものか。

小さな口に口づける。舌を絡めせると、リウヒの体が、諦めたように力を抜くのが分かった。

\*\*\*\*\*

諦めたら駄目だ、早くここから抜け出さないと。

深夜、寝息を立てている兄の腕の中にリウヒはいた。離れようとしても腕は一向に緩まず、むしろ強く引き寄せられる。

お前はもう闇に落ちているのだ、なぜ無駄な抵抗をする、とどこから声がする。流されてしまえ。

嫌だ、わたしにも矜持というものがある、みすみす兄の手に落ちて

たまるかと反発しても、それはだんだん弱弱しくなつてゆく。こんな体では、宮に帰れない。こんな汚れた体では。

何をいまさら。もう一つの声は嘲笑した。わたしは昔から汚れているではないか。

あの老人の手によつて。たつた四つの実娘を陵辱した、あの老人の手によつて。しかもその血は体内を巡っている。

でも、みんなに嫌われてしまう。必死になつて抵抗する。

馬鹿な娘。声は相変らず嘲笑したままだ。お前は嫌われているのだよ。その証拠に誰も来ないではないか。それでも夢だと思ひこもうとしている馬鹿な娘。仲間がなんだ、ちやほやされるのは、王だからだ。王女だったからだろう。地位をなくしたお前など何の価値もない。そのまま堕ちてしまえ。堕ちろ。そうすれば楽になる。

ああ、いつそ楽になつてしまいたい。何も考えずに。

それでも。抵抗しても無理なら、従順な振りをして機会を待てばいい。昔、カガミも言っていた。物事には時期というものがあると。でも時期はいつ来るか分からない。それならば、自分で作り出すのも手かもしれない。駄目で元々、やってみる価値はある。

リウヒは小さく息を吐いて、目を閉じた。

## 彼らの焦燥

リウヒが突然失踪した。東宮の寝殿の警備兵は、薬を嗅がされており王の寝台はもの抜けの空だった。

本殿は混乱状態に陥った。すぐに集まった重鎮たちは口々に右將軍を責め立て、警備兵を統べるシラギは苦渋の顔でそれを受けていた。「全てわたしの不始末だ……」

それでも非難の声は、次々と上がってやまない。

カグラは猛烈に腹が立った。ただ非難するのは簡単なことだし、確かに責任はこの男にある。しかし、今は何をなすべきかこいつらは分かっているのか。即刻、王の行方を探すのが先決だろう。

一刻立つても事態は動かない。我慢の限界が来た。

つと振り上げた拳を卓上に叩き落とす。ドオンともものすごい音がした。

重鎮たちは驚き、口をつぐんだ。静寂が訪れる。

「右將軍の責任追及は、そこまでにしておいて、まずは陛下を探しましょう」

底冷えのする微笑みを浮かべて提案すると、彼らは息をのんで首をすくめた。

「右將軍には謹慎を言い渡す。追って沙汰するまで自室で謹んでおれ」

宰相の言葉にシラギは立ち上がった。深々と一礼をして室を出て行った。追うように兵が付く。これで警備兵が宰相の管理下に置かれたことをカグラは悟った。

「ただちに国中を搜索しよう」

「王が行方不明と知られれば国は混乱する」

「闇者を雇おうか」

「それは最終手段だろう」

「その闇者が浚った可能性もあるではないか」

「中將軍、暗部あんぶからの報告は」

「ヨドからの報告はまだありません」

「いたずらに動いても……」

結局、王は病気ということにして、秘密裏に事態を運ぶことになった。

城下や町村の奉行を統括するいわば警察のようなものの頂点である中將軍ダイゴが席を立つ。新王直立後、リウヒが「真面目だから」という理由で抜擢した青年は陰鬱でかつての黒將軍の陰気さをかき集めて団子にして増幅させたような、そんな独特な雰囲気放っていた。後ろに鬼火でもひきつれていそうな感じである。

めつたに口を開かず、笑わない。

「わたしも明るい方ではないが、ダイゴ殿の引力には驚くことがある」

直訳すれば、シラギでさえも辟易しているその中將軍は、成程、仕事ぶりは真摯で宰相から引き継いだ暗部の管理も任されている。

自国各国の情報を探る暗部の頭、ヨドとは凹凸的組み合わせと噂されていた。

「しかし、どこのだいつが陛下を浚ったのか」

物盗りや族ならば、わざわざ薬など嗅がさない。殺すだけだ。しかもやられていたのは東宮の寢殿の兵だけで、まるで犯人は煙のように現れて消えた。

「トモキを呼んでください。あの男は宮廷の地理に詳しい」

青い顔して駆け付けたトモキは、古びた地図を広げて説明を始めた。

「……だから、よほど宮廷と後宮に詳しいものでないと、不可能なんです」

「考えたくはないが、宮廷内に手引きをしたものがいるかもしれん」  
宰相の低い声に、全員が驚愕する。

カグラはその重鎮たちの表情を淡々と探っていた。彼らが全て新米国王に忠誠を誓っている訳ではない。宮廷と繋がり深い大学が、

国や王を操っている人間たちがどこまで内部に食い込んでいるか分からないのだ。

ましてや奴らが企んだ可能性も否めない……。

「違うと思うわ」

深夜、草木も眠る頃。人目を避けて密会した女はあっさりとそう言った。

踊り子は色々な宴に花を添え、酌をしつつも話相手となる。故に情報には敏く反応する。

「何か企んでいる時ってね、過剰に慎重になるのよ、ああいう人たち。けれども今回はそうじゃなかったもの」

あんたもヤキが回ったわねー、とマイムは意地悪そうに笑った。

「他人の心配なんてする性格じゃなかったのに」<sup>タイプ</sup>

「心外ですね。わたくしの胸は常に婦女子方への愛しみで溢れておりますのに」

「たわごとは置いておくとして」

カグラの言葉をあっさり放置して、マイムは表情を変えた。

「トモキが自室に軟禁されているらしいのよ」

想像にしがたくはない。自他共に認める過保護兄が混乱のあまり、とち狂った行動に出たのだろう。

「昔、国務に疲れたら海を渡って逃げてやるって言ってたんだ。じやあばくはみんな追いかけてやるって返した。もしかしたら、本当に実行に移してみんなが追いかけてくるのを待っているのかもしれない」

うわ言のようにそう繰り返しているという。

カグラは溜息をついた。それでは使い物にならない。謹慎中のシラギと接触し露見すればまた面倒なことになるだろうし、キャラは元々視野に入れるべきではない。

「ねえ、カグラ」

折れそうなほど細い三日月を見上げながら、マイムはひとり言のよ

うに言った。

「あたし、あの小さな王さまが結構好きなのよ。宮廷のボンクラどもは、頼りにならないわ。だから早くあの子を見つけ出してよ」

\*\*\*\*\*

「勝負」

アナンの声にリウヒは頷いた。

「兄さまに勝負を申し込みます。もしわたしが勝てば、宮に帰してください」

「君が負けたら？」

おかしそくに笑う兄に、腹が立ったが澄まして答えた。

「二度と宮に帰りたいとはいいいません」

「わたしの妹は本当に勇ましい」

クツクツと笑い声をたてて、アナンは妹の額に唇をつける。リウヒは無表情でそれを受けた。この兄にとってわたしはまるで人形のようだと思いつながら。

「何本勝負にする？ 御前試合のように三本にするかい」

「一本で結構です」

自分の力量は知っている。体力が続かなくてすぐに息が切れる。稽古の時もシラギに散々それを指摘された。

「分かった。ではやろうか」

これから遊びにいくのか、という風にリウヒの手を取った。

\*\*\*\*\*

甲板で剣を片手に対峙する頭領と娘を見物しようと、海賊たちが集まっている。

「なにが始まるんだ？」

顔をのぞかせたキジとクロエに、男の一人が答えた。

「嬢ちゃんが頭領に勝負を挑んだらしい」

「へえ」

感心して娘を見やる。呑気に構えている頭領に対し、リウヒは目をぎらつかせて相手を睨んでいた。長い髪は邪魔にならないように、高い位置で括っている。

「そんな危険なことを……」

クロエは顔を青くして、心配そうにうろたえている。

「な、どっちにかける？ 一口銅一枚で」

仲間たちのほとんどは頭領にかけている。そりやそうだろう、キジたちは何度もあの男と共に商船を襲っている。実力は嫌というほど知っている。

「おれ、嬢ちゃんに一口」

多分、あの娘は負けるだろうけど。銅一枚くらい失ってもいいかなと思った。奇蹟が起これば一攫千金だ。ま、そんなに甘くはないけれど。

「おれもあの子にかける」

クロエの声にキジは小さくため息をついた。あー、またこいつ恋する男の顔だよ。

「勝負は一本」

男の一人が中央に立って、高く手を上げた。

「始め！」

娘の足が地を蹴った。勢いよく、相手に突っかかってゆく。頭領は余裕で払いのける。高い金属音が鳴り響いた。娘はそのまま素早く突きを繰り返すが、その度に流され、止められ、払われる。

あの子、女にしてはなかなかやる。剣の型もきれいだし、踊っているようだ。それに度胸もある。だが、それだけだ。頭領はまるで子供の相手をしているようにかわしている。その顔は、必死に攻撃してくる妹が可愛くて仕方がないという風に笑っている。

娘の息が上がってきた。片手で持っていた剣を、今は両手に持ち直して相手と距離を測りながら隙を窺っている。肩が大きく上下に動いていた。

と、頭領が動き出した。笑ったまま妹に剣を払う。剣のぶつかる大きな音がして、見物者たちは息を呑んだ。下段で剣を交差させ振るわせたまま、兄と妹が睨みあう。

「そろそろ音をあげたらどうだい」

「嫌」

瞬間、娘が小さな悲鳴を上げた。さらに力が加えられたのだろう、手から剣が落ち、すぐさま頭領の足がそれを蹴る。剣は回転しながら海賊たちの集団に突っ込んできた。キジに向かって。

「うおう！」

思わず声を上げて飛びのいた。娘も同時に頭領から飛びすさって距離を開けた。片膝片手について、睨みつけている。

「リウヒ、君の負けだよ」

その時、キジの足が動いた。落ちていた剣を思い切りけり上げる。

剣は娘を目がけて真っ直ぐ甲板を滑り、瞬時にリウヒが動いた。走りながら剣を浚い、猛烈に頭領へ駆けてゆく。地を踏みこみ、高く飛ぶと渾身の一撃を振り下ろした。

頭領の顔が一瞬変わった。襲いかかった剣は、とてつもない金属音をたてて止められる。そのままぐるりと押されてリウヒは甲板に叩きつけられた。

「ああっ！」

クロエが叫んだ。すぐさま起き上がった妹に跨るように頭領がのしかかり、そして剣先をぴたりと首元に付けた。

「勝負あったね。わたしの勝ちだ」

海賊たちが歓声と拍手をあげる。

「さすが頭領！」

「よくやったぞ、嬢ちゃん！」

リウヒは荒い息づかいでしばらく兄を睨みつけていたが、諦めたよ

うに剣を手放した。その体を頭領が抱き上げる。

「さ、見せ物は終りだよ。みな仕事に戻るように」

男たちは素直に返事をして、口々に今の勝負を噂しながら散っていった。頭領も娘と共に部屋へ向かう。

「なあ、キジ」

荷巻きの続きに戻ろうとしたキジにクロエが、声をかける。

「ん？」

「なんであの時、助けたんだ」

足元に転がってきた剣を、なぜあの娘に蹴り渡したのか自分でも分からない。でも、なんとなく助けてやりたいような気がした。ただこの男に説明するのは面倒だった。

「足がすべっちゃった」

肩をすくめてそれより仕事に戻ろうぜ、とクロエを促した。

\*\*\*\*\*

クロエはあれから、ちよくちよくリウヒに声をかけるようになった。作業中でも、舐先にその姿を見つけると、つい足が向いてしまう。

キジは、あれは頭領のもんだとか、下端がさぼるんじゃないかねえとか散々文句をいったが、すべて右から左へ抜けて行った。

「リウヒさま」

「クロエ」

その声で名前を呼ばれる度に、胸がキュッと締め付けられる。

リウヒは最初、警戒していた。無理はない。手を握ったまま離さなかった自分が悪い。

それでも手すりに凭れてぼんやりしている姿は頼りなげで、このまま浚ってどこかに閉じ込めてしまいたい衝動が湧き上がる。あの勝負を見てから、それはさらに強くなった。

「今日はいいい天気だな」

空を見上げてリウヒが笑う。やっと、打ち解けてくれた。少しの距離を保って、仲間たちの事を面白可笑しく話す事によって。

「でも、春の海は荒れることが多いんですよ。昨夜もだいたい揺れたでしょう」

「夜の事は、あまり覚えてないんだ、その……」

困ったように目を泳がせた。胸の内にどす黒い感情が噴き出してきた。それはなぜかまっすぐ目の前の娘に向かってゆく。

「どうして覚えてらっしゃらないのですか」

「あ……」

ゆっくり歩を進めると、少女は怯えたように後ずさりした。

「何をされていたのですか」

頭領の部屋で。兄と妹で。

「来るな。来ないで」

睨みつける瞳に嗜虐心が踊る。逃げようとするリウヒより一瞬早く、その手を取った。

「やめろ、クロエ。離せ」

「ここは死角になっているから大丈夫です」

「そういう問題じゃない、からかうのもいい加減に……」  
その時、上から声がした。

「獲物を発見！ 頭領に指示を上げ！」

はっとして手を緩めると、少女はクロエを振り切ってそのまま駆けて行った。

「どこへいつていたんだい、リウヒ。あぶないから部屋にいなさい」  
頭領の声が聞こえる。扉が閉まる音と共に、先ほどの甘い声とはまったく異なる男の声がした。

「面棍一杯、砲の準備を！ 久しぶりの大物だ、逃すな！」

\*\*\*\*\*

砲が鳴るたびに船に震動が走る。リウヒは寝台の隅で、小さくなつて震えていた。

この音は大嫌いだ。雷に似ている。

そして、どんどんわたしを闇に引きずり込もうとしているみたいだ。そうだよ、闇に落ちてしまえばいいじゃないか。あの声が聞こえてきて、リウヒは慌てて耳を塞いだ。しかし、声は内側から聞こえる。お前はよくがんばったよ。散々抵抗して、勝ち目のない勝負まで挑んで、なんとかここから逃げようとした。声は猫なで声で話しかけてくる。それはとても優しく慰めるように聞こえた。

だけど、結局はすべて裏目に出た。抵抗は兄を煽っただけだったし、剣勝負は自分の首を絞めただけだった。いいじゃないか、もう諦めてしまえば。

耳を押さえる手に力を入れても声は笑う。

わたしはお前がなんで抵抗するのか分からない。そのまま流されてしまえばいい。何も考えずに、楽になればいい。

ああ。もう嫌だ、もう無理だ、苦しくて堪らない。

「もう終わったよ。大丈夫かい」

「兄さま」

「可哀そうに、こんなに震えて」

兄の手が自分を抱きよせる。

もう何も考えたくはない。逃げてしまえ。流されてしまえ。

そうすれば楽になる。楽になりたい、楽になりたい。

リウヒの白い手が上がった。

「兄さま、怖かった」

逞しいその体に縋ると血と汗の匂いがした。雄の匂いだ。

いいや。誰が負けるものか。兄の肩に額を付けながらリウヒは齒を食いしばり、踏みとどまった。

大人しく従う振りをして機会を待たなければ。そうだろう、カガミ。

かつての教師の言葉を思い出す。心に刻み込むように、何度も何度も繰り返し。

会議があるとかで部屋に海賊たちが集まっている。甲板をうろつろした揚句、やっぱりここが落ち着くと舳先に腰を下ろした。

海は今日も穏やかに輝いている。さてと。

遠くを眺めながら、リウヒは思案を巡らすのが日課になっていた。海の上ではどうしようもない。きっとその内、陸地へと上がるはずだ。隙を見て逃げ出そう。しかし、兄は自分を離しはしないだろう。だれか味方を作らないと……。

ぼんやりと考えている内に、うとうとしてきた。

「……さま、リウヒさま」

目を開けると、真正面にクロエの顔がある。思わず身を引くと、手すりに頭をぶつけた。

「痛っ」

「だ、大丈夫ですか」

男の手が伸びる。リウヒは焦った。どうしよう、何かあったら突き飛ばそうか、それともこの距離なら頭突きか。

いきなり乾いた音がして、クロエの頭がはたかれた。

「痛え！」

驚き顔を上げると、橙色の髪の男が笑顔で立っていた。手を振りおろした格好でにこにこしている。

「クロエくん。お仕事さぼってなにしてんのかなー？」

「さぼってなんかねえよ！ちゃんと飯はつくっただろ！」

「それでもまだまだ、やる事はあるんだよー。下端の君にはねー」

橙男は、チャツと手をあげ

「じゃ、嬢ちゃん。失礼するぜ」

と言ってクロエを引きずって去っていった。リウヒはしばらくぼかんと口を開けて、それを見送っていたが、遠くから兄の声が聞こえ

て、慌てて腰を上げた。

\*\*\*\*\*

アナンは横で深い眠りに落ちている、妹の髪を梳きながら寝顔を見つめていた。

ランタンに照らされた横顔は、無垢で清らかだ。それでも自分とこの子の中には、汚らしい血が流れている。

いや、それは言い訳だな。と自嘲した。わたしはただこの少女を欲して堪らないだけだ。

そして手に入れたのに、そこからいつ飛び出て行くか分からない不安に怯えている。

何故なのだろう。ここに来た当初とは比べ物にならないほど従順になったのに。

まるでこの娘の藍色の髪の毛のようだ。どれほどしっかり握りしめても、手を開けばサラサラと零れていってしまう。

世界は自分を中心に回っているはずだった。窮屈な宮にしろ、この海の上にしろ、注がれるのは憧れや尊敬、好意の視線だった。

リウヒの目にはそれがない。大人しく腕の中に閉じ込められても、その黒い瞳は自分を通り越して、遠くを見つめている。

だが、時間が経てばこの妹も、自分を見るようになるに違いない。必ずそうなるはずだ。

以外のものは排除しなければ。最近、クロエが舐先にいるリウヒにちよくちよく声をかけていることには気が付いていた。間違はなく妹に目を付けている。

アナンは藍色の髪を一房とり、口をつけると天井をみて考えた。しばらく陸地に降りていない。そろそろあいつらにも、女を宛がつてやらないとこの娘を狙いだすかもしれない。が、ティエンランは王の行方捜しで必死になっていることだろう。

ここから近いところ。クズハにでも行こうか。美人の産地で有名な国だ。

手を開くと、リウヒの癖のない髪がサラサラとこぼれていった。

## クズハへ

長い髪が舐先で揺れている。またぼんやりと彼方を見ているのだろう。が、クロエはあれからまったくりウヒに近づけなくなってしまう。キジの監視の目がきつくなった。ちょっとでも舐先に行こうとすると、襟首を掴まれる。山のように雑用を言い渡される。新参者の自分は下端なのだ。貴族の息子だからといって、特別優遇されるような場所ではない。

あの藍色の髪の少女は、何度も夢に出てきた。

ある時は、恋人として甘えたように口づけをねだった。

ある時は、妻として、横で微笑んでいた。小さな赤子を抱いて。そしてある時は、裸で煽情的に誘惑した。

なんにしても全て夢だった。目を覚ますと、いつもの大部屋の吊床の上で、様々な艤が各方面から聞こえているだけだった。

「何、ぼっとしてんだよ」

はっとして現実に戻る。

「おーまーえー。また嬢ちゃんをみてたんか」

「いや、あの、船の先端を」

キジが呆れたようにクロエを見る。

「お前ってほんと、ウソが下手よな」

何にも言えなくなってしまった。

「何度もいつてるだろう。嬢ちゃんだけはやめとけ。頭領のもんだ」

「分かっている」

そんな事は十分、分かっている。

「まあ、気持ちは分かんんでもないけど」

なんだと、この男もリウヒを狙っているのか。睨みつけると呆れた顔をされた。

「ばーか、しばらくやってねえから溜まってんだよ。いーよなー。頭領は」

心底うらやましそうに、ぼやく。

「ああ、でももうすぐ陸にあがるぞ」

初耳だった。驚いて聞き返す。

「どこに？ まさかティエンラン……」

「まさか。頭領が、そんなバカなマネするかよ。クズ八だ」

そしてえらい真剣な目をして、クロエを見た。心なしか目が血走っている。

「美人がわんさかいるぞ。俺の好きな女も」

待っててちょうだい、アイカちゃん。明日会いに行くよー。歌いながら弾むような足取りで、去って行ってしまった。

\*\*\*\*\*

「明日、久しぶりに上陸するよ」

リウヒは腕をおいて兄を見た。相変わらず食欲がわかない。今まで無限大にあったのに、トモキが注意するほど食べていたのに、この船の揺れのせいだろうか。

「クズ八を知っているだろう」

無言で頷く。

ティエンランの隣にある国だった。湖に浮かぶ白亜の王宮と、美形の多いことで有名な国だ。王は病に臥せており、王弟が政治を代行している。

「君もいい子にしていたから、おろしてあげよう」

「本当に？」

アナンは笑った。

「ただし、逃げようとしたら、どうなるか分かっているね」

リウヒは再び頷いた。絶対に逃げてやる。

「兄さま、お願いがあります」

「何だい？」

「闇夜に浮く町の灯りが見てみたい」

「可愛いお願いだね」

アナンが椅子を立った。手を差し伸べる。

「おいで、リウヒ。大分と陸についてきている頃だよ」

手を引かれて甲板に出た。冷たい風が心地よかった。夜空に星が散りばめられたように瞬いている。東宮の小庭園でみる星空とはまた違い、遠く果てしなく続いていた。

「ほら、あそこだ」

兄の指す方向を見やる。漆黒の闇の中、遠くに小さな灯りたちがキラキラと灯っていた。まるで地上の星空のようだ。天空のものよりは随分、つましいけれど。あの灯りが集まっている所が港なのだろうか。

「きれい……」

小さくつぶやくリウヒを、アナンが後ろから抱きしめた。

\*\*\*\*\*

突然、奇っ怪な声を上げたキジに、後ろにいたクロエが怪訝な顔で振り返った。

二人で見張り台にいる時だった。

「どうしたんだよ、何か発見したのか」

「いや、えーと、なんでもない。ちよっと持病の癩が」

「は？」

「とにかくお前はこっち見るな、お仕事しましょう、お仕事！」

ああ、人間ってなんでいざというときに、うまい言い訳がでてこないんだ。

キジは舌打ちしてクロエを押えこもうとする。が、余計気になったらしく、親友はその手を振り切って見てしまった。

甲板の手すりに凭れて頭領とその妹が、陸地を見ている。いや、見

てはいない。頭領は後ろから妹を抱きしめて、口づけている。妹は大人しく受けている。

あんたら兄妹でなにやってんのー！ 大声でつい突っ込みそうになった。

「なあ、そろそろ仕事に戻ろうぜ」

声をかけてもクロエは動かない。

「大胆だよなあ、頭領も」

呆然としたように、一点を凝視している。

「ああ、目の毒だ。早く明日になんねえかな」

その目から涙が溢れてきた。

「おい、クロエ！」

さすがに見かねて腕を引つ張ると、崩れるように尻持ちをついた。

しかし、すぐに起き上がって甲板を覗きこもうとする。抑えつけるともがく様に暴れた。

「やめろよ、おれに構うな」

「構うよ！泣くくらいならもう見んなよ、お前……」

そこでクロエは初めて自分が泣いていた事に気が付いたようである。キジの手を掴んでしゃっくりを上げた。

「本当に惚れていたんだな」

その姿に胸が痛む。

「惚れちまったもんは仕方ないよな」

うなだれた黒い頭が何度も頷く。全く、厄介な女に惚れやがって。

「一度だけ協力してやる」

クロエが濡れた顔を上げた。キジは懷を探り、小瓶に入った青い薬を取り出す。

「睡眠薬だ。頭領に使い。寝た隙に嬢ちゃんに接近しろ。ただし、それ以降はあきらめろよ。あとな、嬢ちゃんが泣くような無理強いはすんじゃねえぞ」

いいな、と小瓶をクロエの手に握らせて、その上からグッと握らす。自分の想いを打ち開けてしまえば、この男も大人しくなるかもしれ

ない。

「いいな、あきらめろよ。その方が、お前の為、嬢ちゃんの為、頭領の為だ」

甲板の二人はもう消えていた。

陸地の灯りは、先ほどよりもだいぶはつきりと見えてきている。

\*\*\*\*\*

久しぶりの陸地は奇妙な感覚だった。一体どれくらいぶりに立ったのだろう。

兄に手を引かれて、降りたりウヒはその感覚を確かめる為に、その場でトントンと跳ねた。

アナンが微笑む。海賊たちも、無邪気な仕草にさざめくように笑った。

一行は根城として一軒家に向かう。荷下ろしが一段落してから、酒場へ向かった。

扉を開けると、女たちが群がる。頭領であるアナンのつれなさを詰った後、海賊たちと陽気に飲み始めた。

リウヒは非常に居心地悪かった。こんな公衆の面前で、兄の膝の上に座らせられて。しかし、アナンは離してくれない。

「やつだー。可愛い女の子ー。何？お人形さん？」

「きゃー。ちっちゃーい。まさか頭領の恋人ー？」

女たちのかしませい声にアナンは、笑って答えた。

「麗しの妹だよ」

愛おしそうに、その頬に口を寄せる。女たちは一気に引いた。

そりゃあ、引くだろう。わたしでも引くと思う。リウヒは赤い顔を上げられない。

果実酒など、可愛らしいものはなく飲物は酒しかない。仕方なく水

と酒を交互に飲んで、時間を過ごしている内に厠へ行きたくなくなった。その事を兄に告げると、「早く帰ってくるんだよ」と離してくれた。リウヒはアナンの膝から飛び降り、酒場の隅へ歩いて行った。

\*\*\*

クロエは酒場に入った時からアナンの酒に薬をいれる隙を窺っていた。

そして成功した。さらに女をそそのかして、二階の室に頭領をつれていくよう仕向けた。

この際、なりふり構ってられない。

女は喜々として、意識が朦朧とし始めた男を引つ張って消えて行く。席を立っていたリウヒが戻り、兄の姿が見えない事に戸惑ったように辺りを見回している。

「リウヒさま」

声をかけると、小さな背がびくりと跳ねた。

「頭領は、まだ帰らないようです。先に家へ戻りましょう」

少女は警戒したように首を振る。

「わたしも一緒に参りますから」

手を伸ばすと怯えて身を引いた。

「こないで」

クロエはため息をつく、親友の姿を探した。無理はない、下心はばれているのだ。ならば、キジと一緒になら警戒心は溶けるかもしれない。

目的の親友は大分と離れた席で、見事に太った女の肩に手を回し、楽しそうに酒を飲んでいた。

「どうした、クロエ」

「悪いけど、一緒に来てくれ」

問当無用でその腕を引きずって連れ去る。

「えっ？ なに？ おれ、これからアイカちゃんとめくるめく世界へ…。ちよつとー！？ アイカちゃん！ お願ひ助けてー！」  
間抜けな恰好で引きずられてゆく男を、アイカちゃんは目を丸くして見ていたが、一転笑顔で手を振ると男前の髭親父の所へ、跳ねるように行ってしまった。

「ああああー。だから男前って嫌いなんだー。おい、クロエ！ おれの貴重な時間と女を無駄にしやがって！ どうしてくれるんだよ」  
「あとで酒一本やるから付き合ってくれ」

「いや、二本を要求する。いいからもう離してくれよ。なんなんだよ、一体」

クロエは事情を説明した。キジはふんふんと聞いて呆れた声をだした。

「小娘を送り届ける為に、おれを拉致ったのかよ。だいたい、お前が譲ちゃんにちよつかい出すから……」

「協力してくれるっていったらどう」

「一回だけっていったんだ」

ところが今度はそのリウヒの姿が見えない。

「まさか、逃げた？」

「やばくねえ……？」

二人は顔色を変えた。

「頭領は、あの薬を飲ませて女と一緒に上にいるはずだ」

「分かった。取りあえず、嬢ちゃんを探そう。それでも見つからなかったら、あいつらにも言っ手分けして搜索するしかない」

クロエとキジは、慌てて酒場を飛び出した。

\*\*\*

酒場や港の賑わいの声が、大分遠くなった。リウヒは死に物狂いで駆けていた。当てもない。方向も分からない。しかし、とにかく港

から離れなければ。

通りを走れば目立ってしまうかもしれない、と考えて脇の林に入っ  
たのが間違이었다。

「あっ！」

木の根に蹴躓いて、すっ転んだ。

急いで身を起こすと重いような痛みが、足首に走った。どうやら捻  
ったようである。

痛みを堪えて走ろうとしても、足は思うように動いてくれない。

「もう……」

情けない。本当に自分が情けない。

やっと巡った機会だったのに、わたしはここで何をしているのだ。  
早くしないと、兄に見つかってしまう。そうならば、どんな仕打ち  
が待っているのか、想像するもの恐ろしい。

その時、ガサガサという音が近くに聞こえた。焦りのあまり、冷汗  
が伝う。追手が来たのか。それとも物盗りか。どちらでもなかった。  
薄汚い野犬だった。

「なんだ」

ホッとしたもののつかの間、野犬は獣の目でリウヒを見据えながら唸  
っている。飛びかかりそうな体制で、獲物を狙うかのように距離を  
測っていた。

「や……」

周りを見渡しても、武器になりそうなものはない。恐怖のあまり後  
ずさると、野犬は調子に乗ったように牙を剥いた。その口から流れ  
る涎がやけに目をつく。

わたしを食う気なのか、こいつは！

バネのように獣が飛びかかる、リウヒは思わず身を縮め、目をつむ  
った。

その瞬間、痛々しい声が聞こえた。

目を開けると野犬が転がって悶えている。そこに彼方から石が飛ん  
できて、再び犬の身体が跳ねた。

「おい、大丈夫か！」

橙色の頭をした男が、草木をかき分けながらやってきた。そして痙攣している野犬を思い切り蹴り上げた。犬はギャンと鳴いて動かなくなってしまった。

「あ……」

木にしがみ付いていたリウヒは、そのままズルズルとへたり込んだ。「勝手にチヨロチヨロすんじゃないよ。頭領にばれたら、おれたちだってタダじゃおかないんだぞ」

ああ、駄目だ。見つかってしまった。悔しさのあまり、涙が出てくる。

睨みつけるように見上げると、男はため息をついて手を差し伸べた。「いくぞ。ほら」

首をふって拒む。男は舌打ちをすると、無理やりリウヒを抱き上げた。

「離せ、離せつたら……痛！」

捻った足首が熱を帯びたように痛む。

「何だよ、足、捻ったのか。後で手当てしてやるから……。ああ、もう暴れるなよ。骨が折れているかもしれないんだぞ」

突っぱねようとしても、どれだけ暴れてみても、男の手は緩まない。早くこの腕から逃れて遠くへ行かないと、兄に知られたら……。

「逃げたこと、頭領には内緒にしておくから。おれたちと帰った時に、捻ったって言えばいいさ」

リウヒの心を読んだように声がした。顔を上げると、橙頭は笑った。

「おれ、キジ。お前の名前はリウヒっていうんだろ」

なんだろう、この男。どこかで見たことがある、知っている顔だ。好意さえ寄せていた。どこか、昔に……。

「キジ！」

駆けるような足音がして、クロエがやってきた。

\*\*\*

足首に木板を当てて固定し、濡れた布を当てると、チビは痛むのか僅かに顔を歪めた。

「しばらく冷やしておけ。逃げるんじゃないぞ、無理すると変形する可能性だってあるんだからな」

根城の客室で、寝台に座ったりウヒは不貞腐れたように、ゴニョゴニョと何かを呟いた。

「何だよ」

「……ありがとうといった」

そのままプイと横を向いた。

礼を言う態度かよ、それが。こっちはアイカちゃんとの蜜月時間をうつちゃってまで探し回り、野犬に襲われていた所を助けてやったというのに。

「わたしがお傍についていますから」

気取ったようなクロエの言は、「いらない」呆気なく一蹴された。可愛くねえチビだな。さすが王さまだぜ。

「お前たち、下がってよい。一人にしてくれ」

偉そうな言い方にむっとしたもの、心ふんだんに残ってそうなクロエを引きずって部屋を出る。

「なんであんなチビでガリガリの小娘に惚れるんだよ。おれはさっぱり分からねえ」

大部屋で約束の酒二本を、ほとんど自棄飲みしながらキジが文句を言った。

性格は可愛くないし、不思議でならない。頭領にしろクロエにしろ。女は、もっとプリツとしていて年上に限る。細い女なんて、骨が痛いだけじゃないか。

「おれも不思議なんだ。もしかしたら、前世で繋がっていたのかも

しれない」

うつとりと語る親友に、ケツと鼻を鳴らす。

ティエンランの人間のこういう所が、キジは嫌いだった。前世だろうが、現世だろうが、来世だろうが、生きるのは本人ではないか。運命なんて勝手に決められてたまるかと思う。

魂が何度もグルグルと転生するなんて、所詮は苦行だろう。

死んだら魂は西の果てへゆくそうだ。先に死んだ自分と深く関係のあった人の魂が、待っていてくれるという。胡散臭い。第一、そんな事誰が言い始めた？ 死んで生き返った人間でもいるのか？

どちらにしても、宗教の話は相容れないことを、今までの経験上分かっている。

「ちよつと厠にいつてくる」

「おう」

が、クロエは中々帰ってこない。まさかと思つて客室を覗いてみると、眠るリウヒの髪を愛おしそうに梳いていた。さらに口づけまでしようとする黒い頭をはたいて、大部屋に連行した。

「馬鹿か。お前は」

\*\*\*

アナンが目覚めると、前に汚い女の寝顔があった。驚き飛び起きると、激しい頭痛がする。寝台から降りて、ふらふらと歩きだす。気が付けば、自分も寝台の女も全裸だった。いそいで衣をまとい、宿を出た。

妹はどこだ。どこへいった。

昨夜の記憶がほとんどない。あれしきの酒で、記憶が飛ぶなんて。まさか、自分がいない間に誰かに抱かれていたのでは、記憶がない間に逃げたのではと思うと、足がすくむほど恐怖だった。

なぜ、妹とはいえ娘一人にこんなに執着するのか、自分でも分から

ない。狂っていてもいい、あの家にいてさえくれれば。無事でさえいてくれれば。

駆けるようにして、いや、ほとんど駆けながら一軒家へ急いだ。途中、部下たちがアナンに気が付き声をかけたが、応える余裕すらなかった。

リウヒは、客室に寝ていた。きちんと衣をきて、すやすやと。何故か足に木板が巻き付かれている。思わずその場に座り込み、安堵の深いため息をついた。

音に反応して妹が目を開けた。

「兄さま」

身を回転させてこちらを見た。寝ぼけたように目をこすっている。

「おはよう。昨日は宿に泊っていたの？」

頭痛も吹き飛んだ。リウヒの手を取って口を付ける。

「どこにも行かないと言ってくれ」

手を引き寄せるとリウヒが倒れこんできた。その体を抱きしめる。

「ずっとわたしの傍にいますと」

「兄さまは、変なことを言う」

笑いを含んだ声がした。

「そんな女の人の匂いをプンプンさせて」

「違うんだ、これは、その」

アナンは生まれて初めて、言い訳をいうものを必死で行った。

\*\*\*

なんだかんだと一生懸命、兄が紡いでいる言葉を右から左に通過させながら、リウヒは昨日見た夢を反芻していた。

シラギが迎えに来てくれた。自分は何故か船に一人で、海賊たちは誰もいなかった。

さあ、いこう。みなが待っている。

うん。はやく会いたい。あの愛おしい人たちに。

スザクの宿に入るとみんながいた。キヤラがもうどこ行つてたの、と腰に手をあてて口を尖らせ、マイムが仕事があるんだから、早く手伝いなさいと刺繍用の針と糸を持ってきた。

カグラはその後ろで、もう刺繍は勘弁と酒を飲んでいて、カガミは横でつまみを食べながら笑っている。トモキはカガミに食べすぎですよと注意をして、リウヒにおかえりなさい、遅かったですね、心配していたんですよ。と柔らかく睨みつけた。

シラギはひっそりと笑っている。

ごめんね、遅くなって。ただいま。

リウヒがそう言つと、みんなが笑つて早くおいでという風に腕を伸ばす。

ああ、わたしの居場所。光に包まれて、温かい空気の流れるわたしの大切な居場所。

夢ならば、このまま覚めなければ良かったのに。ずっと夢の中で暮らせればいいのに。

\*\*\*

アナンは窓の外を見ながら思索していた。これから西の賊と取引がある。しかし、妹を一人にさせておくわけにはいかない。酒場の女はリウヒと合わない。部下たちは危険な者だらけだ。

ああ、そうだ。キジなら安全だ。あの男の好む女はなぜか、みな一様に太っていて年上だった。部屋の外にいる男の一人に、キジを呼ぶよう言ってから妹に向き直る。

「これからわたしは、用があつて出かけるが」  
寝台に腰かけて、その顔を慈しむように包む。

「一人、話し相手をよこすからね」

「ほっておいてくれていいのに。兄さま」

「心配なんだよ」

額に口付ける。

「すみません、呼びました？」

キジが来た。

「この子の話し相手をしてくれないか。君にしか頼むことができないからね」

驚いたような三白眼を見つめながら笑顔でアナンは言った。

「だが万一、妹に手を出したら」

橙色の頭を引き寄せて、

「殺すぞ」

低い声をだした。キジの肩が、びくりと跳ね上がる。

「じゃあ、いつてくるよ」

リウヒの頭を優しく撫でる。何度も、何度も。今生の別れのように。離しがたい兄に、妹は小さく笑うと身を引く。

「いつてらっしゃい、兄さま。気を付けて」

アナンはやっと離れた。

「頼む」

とキジに一言告げると部屋から出て行った。

## 拳骨一つ

キジは目のやり場に困って頭をかいていたが、リウヒと二人きりになつてさらに困つた。

可愛げのないチビでも、一応は王さまだった。それ相当の言葉使いがあるだろう。

「えーと、そのー。本日はお日柄もよくー」  
そこで終わってしまった。

目を泳がせて、進退極まったように頭をガリガリかく。

リウヒが小さく笑つた。

「いつもどおりの話し方でいい。悪かつたな、昨日は。足は大分マシになつた」

「それはよかつた。どら、見せてみる」

布を取りながら、チビの足はやっぱり小さいものなんだと思つた。まるで子供のようだ。足首は痣があるものの、腫れは幾分引いていた。ゆつくりと曲げる。

「痛いかな」

「痛……。あ、でも昨日ほどじゃない」

「そうかな」

再び木板に布を巻きつきながら、勝手に動かすんじゃねえぞと念を押した。リウヒは黙って頷いただけだった。

「まさか、お前のお守り役を押し付けられるとは思わなかつたよ」

冗談めかして言うと、チビは小さく笑つた。

「心配性だから。兄さまは」

違ふ。頭領は話し相手といったが、大方、この少女が逃げ出さないように、と、他の男たちが手を出さないように見はれという意味なのだろう。彼らがそうするはずなのに。唯一人、クロエを除いて。  
「あの」

目をあげるとリウヒが自分をじつと見つめていた。

「お前、どこかで会ったことないか。どこかで…昔…」

もしかして、おれは口説かれているのだろうか。  
やめてくれ、頭領に殺される！

——殺すぞ。

ドスが効いた声が蘇って、キジは白目をむきそうになった。

「セイリユウケ原で、おれ、ほとんど先頭を走っていたから……」  
そうか、だからかな、と娘は首をかしげる。

そのまま沈黙が続いた。キジはなんだかいたたまれなくなつて

「昼、持つてくるから」  
と部屋を出た。

小さな食堂にクロエがいた。

「どこ行つてたんだよ」

「嬢ちゃんの子守りを押し付けられた」

「何でキジが」

こちらを睨む眼差しに、嫉妬が含まれている。勘弁してくれよ、もう。

キジがため息をついた時、仲間の一人が声をかけてきた。そのまま横に座つて、何故か小声で続ける。

「酒場で、とんだ噂をきいた。知っているか」

二人は首を振る。

「ティエンランが嬢ちゃんに金をかけた。金三十」

「ええっ！」

藍色の髪、黒い瞳、十七歳の娘を探している。本人を連れてきた場合は金三十を出す。情報のみの場合はその信憑性によって金額が変わる。

「頭領は知ってますか？」

「いや、多分まだ知らないだろう。おれも今聞いたところだ」

「金三十なんて、一生遊んで暮らせるじゃねえか……」

男は、違う仲間を見つけそのまま席を立てて行った。

ティエンランは血眼になって国王を探している。リウヒが船に乗って約三か月。クズ八までこの噂が流れるなんて、相当なものだ。

「でも、帰してやらなきゃいけないよなあ……」

王さまだもんなあ。

「なんでいきなり、そんなこと言うんだよ」

「んー？ うん……」

チビはチビながらに、宮に帰りたくて堪らないのだろう。右も左も分らない土地で逃げだすほどだ。蹴躓いて足を捻る辺りが鈍くさいが。

「嬢ちゃんに、昼持っていく」

腰を上げると、おれもいく、と目の前の親友も立ち上がった。

「くんな」

「なんでだよ」

「お前、今ちよつと面倒くさい」

前のめりになって窓の縁に足をかけた時、部屋の扉が開いた。

「おーまーえー……」

ギクリとして振り返ると、キジが盆を机に置いて、リウヒの首根っこを猫のように掴んだ。はずみで二人、寝台に倒れこむ。

「見上げた心意気だけどな、足のこともあるんだ、少しは大人しくしている！」

「出来るか！ 兄さまがいない機会を逃したら、今度はいつ逃げられるか分からないだろう！」

「怒られるのはおれなんだよ！」

転がったまま暴れるように言い合いをしていた二人だったが、ふとリウヒの顔が変わった。

「では、お前も一緒に来てくれ」

「は？」

くるりとキジに覆いかぶさると、精一杯の妖艶な表情を作った。

「お前もわたしと一緒に来ればいい」

目を丸くしている男の耳に響めるように、息を吹きかけるように囁く。

「こ、この体を好きにしてくれて構わないから」

声が震えた。己を鼓舞してキジの耳の下辺りを舐めると塩辛かった。と、いきなりすごい勢いで剥がされた。

そして衝撃が頭上に走り、同時にゴンと音がした。

「馬鹿やろう！」

リウヒは、びっくりして顔を上げた。頭がジンジンと痛い、思考がうまく働かない。なにをしたんだ、こいつは。

「男を舐めんなよ！ おれはなあ、あんたみたいなやせっぽちじゃなくて、もっとこう、ムチムチプリンが好きなんだよ！ 色仕掛けで全ての男が靡くと思ったら大間違いだぞ！ それから人を何だと思ってるんだよ、ティエンランはこんな奴が頂点に立っているのか！」  
勢いよく人差し指を突きつけて怒鳴った後、いきなり慌てだした。

「ご、ごめん。言いすぎた」

「いや、あのわたしもすまなかった」

「痛かった？ 痛かったよな」

「うん、ちよっと……。いや、かなり」

ほんとごめん、思わずかつとなつて。いやいや、わたしが悪かったとしばらく二人はコメツキバツタのようにヘコヘコと、頭を上下に振った。

そして、顔を見合せて嘔き出す。しばらく笑いは止まらなかった。

「そうか、お前はふくよかな女が好きなのか」

「そうなんだよな！。なぜか昔っから」

クツクツ笑いながら、話はそれていく。

「あのさ。今は足を治すことを考える。また陸地に上がった時は、協力してやるからさ」

「本当に？ 本当に、手伝ってくれるのか？」

「帰りたいんだらう？」

微笑みながらキジはリウヒの頭を撫でた。

「約束する。おれはお前の味方だ」

「ありがとう」

嬉しかった。涙が出るほど嬉しかった。この男の言葉が。

リウヒはキジの手を取って、その目を覗き込んだ。

「本当にありがとう」

後ろの窓から光がさした。陽光は一瞬だけ部屋を照らして、雲の影に隠れていった。

\*\*\*

クロエは客室の前で、やきもきして待っていた。扉に耳を当てても、会話はうつすらとしか聞こえない。キジのどなり声がして、その後二人が笑う声が聞こえた。

何を話しているんだ。いきなり扉が開いて、横面をしたたか打ちつけた。

「痛い！」

「おーまーえー」

親友が呆れた声を出す。

「何話していたんだよ」

「秘密」

その顔が心なしに嬉しそうな、楽しそうな感じで面白くない。

「教えてくれよ、なあ」

「内緒」

その時、下がざわめいた。頭領が帰ってきたのだ。

「おかえんなさい、頭領」

まっすぐ客室に向かってきたアナンに、キジが笑顔でいった。

「なぜ外にいる」

「寝ちゃったから、邪魔かなって思って。外に立っていようと」

無邪氣に何故か大声で言う。

アナンはクロエを睨みつけた。お前がなんでここにいると無言で聞いてくる。そんなの分かっているでしょうとクロエも負けじと睨み返す。

しばらく二人は火花を散らし合っていた。

「ああ、そうだ。寝言で頭領のこと呼んでましたよ」

キジの呑気な声に、アナンはちらりと視線をそらせると扉の中へ消えてしまった。

歩き出す親友にクロエは戸惑ったように声をかける。

「リウヒはそんな事いつたのか」

「お前さー、頭領に喧嘩売んなよな。心臓に悪い」

「じゃあ、あれは」

「嘘」

キジは舌を出して、肩をすくめた。

\*\*\*\*\*

扉の向こうでキジの声がして、リウヒは慌てて蒲団を肩までかけて寝た振りをした。

早速助けてくれた男に感謝しつつも、どこかくすぐったい気持ちになる。

「リウヒ。寝ているのかい」

目を閉じたまま動かずにいると、口が塞がれた。仕方なしに起きた振りをする。

「おかえりなさい、兄さま。早かつ……」

言葉は更に深い口づけで消えた。

「退屈はしなかったかい」

こつくりと頷いた。抱えこむようにリウヒを抱きしめた兄は、そのまま藍色の髪を梳く。

「あのキジという人、面白い」

小さく笑った。本当に久しぶりに心から笑った。

アナンの手が止まっている。

「気に入ったのか」

「まさか」

嘘だ。大嘘。

初めてここで、味方だと言ってくれた。

素直に言えば、遠ざけられてしまうのは分かっていた。

「ねえ、兄さま。兄さまの仕事はどんななの？」

「そうだな。奪った商船の荷を売ったり、逆に商船を守ったり。縄張り荒らす他の海賊を追い返したり、様々だ」

「港では大人しくしているの？」

「それは暗黙の了解というものだ。港はわたしたちの金で潤うこともあるからね。海賊同士がかちあっても、お互い知らぬ振りをすることが多い」

「今までどんな国へ行ったの？」

「この大陸と、北のボイル、そして南のアスタガ諸島ぐらいだろうか」

「ねえ、兄さま」

リウヒは甘えたように、上目づかいでアナンを見上げた。

「チャルカに行ってみたい。あの国は食い倒れるというほど、食べ物美味しいのでしょうか？」

そしてクズハに近い。次はもっと慎重に逃げよう。

「やれやれ、わたしの妹は色気よりも食気なのかい」

呆れたように言うとアナンはリウヒを抱きしめた。

\*\*\*

キジは大部屋の自分の寝台にひっくりかえって、両手を天井にかざ

してマジマジとみている。

本当にありがとう。そう言って、握った手は冷たくてしつとりしていた。

「今日は、外に行かないのかよ」

二段重ねの寝台の下からクロエの声がした。

「んー。なんか気分が乗らない。いいや、おれ」

リウヒと話したのは、今回が初めてではない。セイリュウケ原へ向かう途中、自分はほとんど先頭と並んでいた。走りながら気分は段々と高揚していった。

何か楽しっすね。

一番前で馬を駆る少女に思わず声をかけてしまった。

ああ。

少女は真っ直ぐ前を見て笑った。

わたしもだ。

その姿は、勇ましく高貴でなんだかすげえと思った。

まさかその子が、王に立つと宣言した王女だったとは。宮廷の大門下で、堂々と上意の礼をした新しい国王だったとは。民の歓喜の声を聞きながら、キジは真っ青になったものだ。

その少女は、今や兄に囚われて同じ階の客室にいる。

ここにいないべき子ではないのだ。あの宮に帰してやらなければ。

「なあ」

「うわああ！」

いきなり横からクロエの顔が出現して、びっくりした。

「なななんだよ、驚かすな！」

「お前が勝手に驚いたんじゃないか」

ぶつすりとした顔で、寝台によじ登ってくる。寝ていた体をおこして場所をあけてやった。

「外、行かねえの？」

クロエはふくれっつらで顔を背ける。

「あそこの前を通らなきゃいけないから」

客室に頭領は入って行つた。今頃何をしているかは想像にしがたかない。明後日には船は出港する。あの噂を聞いたに違いない。陸に上がったら、半月はいるはずなのに今回はえらく慌しい。室内は二人の他に誰もいなかった。みな外に出てそれぞれ楽しんでいる。

「なあ。キジ」

「ん？」

「痛いんだよ」

ここが痛いんだ。そういつて親友は胸を叩く。苦しそうな顔で。

そのまま倒れて、キジの膝に突つ伏した。

「想っている人と、ただ一緒にいたいだけなのに、なんでそれが叶わないんだ」

絞るようなくぐもつた声が下から聞こえる。

「相手が悪かつたな」

「そんなこと言うな」

舌足らずな声に、はつとして下のクロエの寝台を覗き込む。

案の定、空になった酒瓶が一本転がっていた。

「お前！ 酔うと泣き上戸になるから、ほどほどにしとけて、いつもいつてるだろ！」

「酔ってなんかいねえよ」

しかし、キジの膝上はぐつしより濡れている。クロエは小さく嗚咽を上げていた。

「あーあー、もう……。分かつたよ、付き合つてやるから。愚痴でも、涙でも、鼻水でもどんどん出せ」

呆れたように言うと、酔っぱらいは小声で自分の思いを切々と語り始めた。しばらくは付き合っていたキジだったが、次第に飽いてきた。同じ所を行ったり来たりする話に。

こいつは、酒場に生息する酔っぱらいのおっさんか。同じ話を永遠に繰り返す、あのおっさん連中か。

それでもキジは、目の前でしゃつくりを繰り返す男をあやすように、叩いてやる。

クロエが寝息をたてはじめても、キジは止めることなく、その背中を小さく叩いていた。

## 晴天の下

夜空に大きな満月が鎮座している。その月下、カグラは謹慎中である人物の訪問を受けた。窓から。

「趣のある夜風と共に訪れたのが、美姫であれば申し分のないことですね」

からかいを含めて、その男を見下ろす。

「それともまさか、堅物の黒將軍様が愛の告白をされに参ったとか？」

「ふざけている場合か」

顔を顰<sup>しか</sup>めて謹慎中であるはずの男、シラギはカグラを睨みつけた。

「本殿の様子は副將軍たちから聞いている。お前の意見を聞きに来た」

シラギは部下たちから大層慕われている。その筆頭とはいえ、二人の副將軍である。闊達な老人と一途な美女は、事あるごとに上官の気を引こうとやつきになっている光景を、カグラは何度も目にした。

「陛下に賞金をかけたらしいな。何をかんがえておるのだ、あやつどもは」

「暗部でさえもまだ何もつかめてはいないのです。危険性は高いですが、賭けてみる価値はあるとわたくしは思います」

ところで、とカグラは口調を切り替える。

「あなたも色々と動いているようではありませんか」

この男が小さな国王に抱いている慕情を、カグラは知っている。自分だけではない、あの仲間たちも。セイリユウケ原の戦直前、不器用な男が恋に落ちた光景を、宿の陰からこっそり覗いていた事を本人は気が付いていない。

「闇者を雇う話も出てきたそうだな」

「闇者<sup>やみもの</sup>と呼ばれる集団がいる。法外

な金額を要求する代わりにどんな依頼もこなすらしい。人の命すら簡単に奪う、残忍かつ冷酷な集団。しかし噂だけが独り歩きをしていて、それがどんな輩であるかは実際にもカグラもよく知らない。

第一、依頼方法も分らないのだ。

結果、話は出たがそのまま宙に浮いた状態である。

「トモキも調べ回っている」

「らしいですね」

軟禁が解けたトモキは、宮廷内では顔が広い。書物庫まで足をはこんでいるそうだ。

「図書の主<sup>ぬし</sup>にでも目を付けたのでしょうか」

宮の山裾にあるその場所は、別名「知の城塞」とも呼ばれている。宮廷には王をはじめとする絶大なる権力がある。しかし、図書<sup>ずしょ</sup>だけは治外法権で王ですらも簡単には立ち入ることはできない。その主は書物に限ってのみ一種独特の権力を握っており、闇者ではないがこちらも噂だけが独り歩きをしている状態である。

「黒將軍、取りあえずはお上がりなさい」

「今はお前のその余裕<sup>よゆう</sup>ぶりが腹立たい」

低く呟きながら、シラギが窓枠に手をかけた。

当たり前だ、とカグラは思う。

焦りが一番、危険なのだ。焦燥だけを空回りさせて、周囲を見る余裕も持たず、闇雲に突っ走ってどこへ行くというのだ。

\*\*\*\*\*

晴天の中、船は進む。

リウヒがいつものように、舳先に凭れてぼんやりと遠くを見ていた。陸地を発ってアナンは安心したのだろうか、クズハの時は一度しか外に出さなかったが、今では比較的自由にしているらしい。

「そこ、好きだな」

キジが声をかけた。もちろんクロエも後ろにいる。

「うん、遠くまで海が見えるから」

「足はどうだ」

「もう平気。ありがとう」

クロエの胸がチクチクとする。ただリウヒとキジは話をしているだけなのに。

「そうだ、ここから叫ぶと気持ちいいんだぞ、やってみつか」

リウヒがやるやる、と立ち上がると、キジがこっちこっちと手招きする。

「じゃ、師匠のやり方をよく見ておくように」

船の先端で、しゃちほこばってそういうと両手を広げた。

「息を吸ってー。吐いてー。はい吸ってー」

大きく息を吸い込むと彼方に向かって叫ぶ。

「イヤッサイイヤッサイ！」

「それ、知っている！」

リウヒがはしゃいだ声を出した。

「都に登るとき、みんなその掛声をかけてくれた」

「ああ、覚えてる。楽しかったよなあ」

「実はあの時、道に迷いそうになった」

「マジで？　かつこわりー」

二人はクスクス笑いながら、楽しそうだ。

クロエは全然楽しくなかった。自分には怯えるくせに、キジには許しきったような警戒心すらない笑顔を向けている。しかも自分の知らない共通の話題で盛り上がっている。

「じゃあ、張り切っていつてみようー」

おどけた声に、リウヒは危なっかしく先端に立ちあがって手を広げる。

「いきますよー。はい吸ってー。吐いてー。吸ってー。はいー！」

「イヤッサイイヤッサイ！」

「ゴジョウ！ ゴジョウ！」

キジの声が続く。

リウヒが大声で笑った。青空の下、本当に楽しそうに笑い声を上げるその姿に見とれてしまふ。その周りがキラキラと光って、クロエは眩しさのあまり目を細めた。

「ねえ、もう一回、もう一回！」

「おう、お前もこい」

「えっ？ いいよ、おれはぎゃー！」

二人に手を取られて無理やり引き上げられる。下をみるとそこはもう海だった。自分は泳げない。恐怖に足がすくむ。さらにリウヒとキジに両側から手を上げられた。やめてくれ、なにをするんだ。足もとが狭いため、三人は団子になって肩を組んだ。

「せえの！」

「イヤッサイイヤッサイ！」

「ゴジョウ！ ゴジョウ！」

叫んだ後、大声で笑う。恐怖は去って行ってしまった。横でリウヒもケラケラ笑っている。

いつの間にやら人が集まってきた。元来騒ぎ好きな男たちである。

彼らも大声で合唱し出す。

「いいぞー、嬢ちゃん！」

「もつと声だせー！」

抜けるような空の下、少女と男たちの楽しげな声はいつまでも響いていた。

\*\*\*

「今日は楽しそうだったね」

寝台の上でぐったりと息を弾ませているリウヒの髪をひと房とって、アナンが口をつけた。

「わたしの妹は、あつという間に部下たちを虜にしてしまった」  
今まで話題にすらださなかったのに、今日はみなリウヒをほめたたえる。

「複雑な気分だよ」

「兄さまはわたしにどうしてほしいの」  
妹はうつとしながら兄を見る。

「ただ横にいてほしいだけだ」

「横にいるではありませんか」

眠りに落ちてしまった。

その寝顔を見つめながら、白い体に薄布をかけてやる。

ここ最近、リウヒとキジとクロエはよく一緒にいる。キジに下心はないようだが、クロエは今まで以上に熱い視線で妹を見ている。

クズハの客室の前でも好戦的に自分を睨んできた。

眠りこける頬を撫でる。小さな肩がゆっくり上下に動いていた。

愛するリウヒの瞳は、相変わらず遠くを見つめている。以前にはなかった焦燥感が、アナンの胸の内を支配するようになった。いくら握りしめても零れてゆく藍色の髪。

だが、この少女は永遠にわたしだけのものだ。大切な妹はだれにも渡さない。

## 嵐の夜

四六時中、妹だけには構っていられないらしい。頭領というものは案外忙しいようで兄は

「明日戻るからね。いい子にしているんだよ」

と言ってどこかへいつてしまった。部屋には当然鍵がかかっている。リウヒはため息をついて、寝台に寝転がった。外に出ることさえもままならない。

唯一の楽しみは、キジがご飯を持ってきてくれる時だ。この船の出来事を色々話してくれる。

「ヤバいんだよ、今。食中毒にかかってさ、十人ぐらい寝込んでしまつてんだ。廁がえらい事になつてて、もう勘弁つて感じ。可哀そうにクロエも死んでいる」

笑つてはいけないと思つても、ついクスクス笑つてしまう。

大部屋はなんだかとても面白そうだ。いつてみたいとねだると、キジは顔を青くした。

「駄目だつて。お前をこの部屋から出したら、おれが頭領に殺されちまう」

「キジのケチ」

「そつという問題じゃねえ」

じゃあな、ちゃんと飯くえよ。とキジはさつさと消えてしまった。夕餉を食べ終わると、リウヒは窓の外を覗いた。雨が降っている。なんだか揺れも大きいような気がする。不安になつて、慌てて寝台の隅に陣取つた。枕を抱えて小さくなった。

「おい。飯食つたか」。なんだ、残してるじゃねえか。ちゃんと最後まで食べなさいつてかあちゃんから……何してんの、お前」

「いや、あの、その」

寝台の隅で掛布を頭からかぶり、枕を抱きかかえているリウヒをみて、キジが目を丸くした。

「なんかのおまじない？」

「そ、そう。食後のおまじない」

ふうーん。丸くなっていた目は、小馬鹿にしたように変わる。

「この船の揺れが怖いのかー。いやいや、さすが箱入り娘はビビリだなあ」

その言葉にムツとする。

「怖くなんかない！ 馬鹿にするな！ 食後のおまじないっていったらう！」

「はいはい」

嫌らしく笑いながらキジが手を振る。

「でも、これからもつと荒れるぞ」

「えっ…？」

「久しぶりにでかい奴が来そうだ」

恐怖に目を見開いたリウヒを尻目にキジは「嵐を呼ぶ男―」と歌いながら食器を下げて、出ていってしまった。

夜。キジの予言通り、船は大揺れに揺れた。しかも雷鳴が雄叫びをあげまくっている。

リウヒは雷が苦手だった。大の苦手だった。

菜飯が雷、どちらを選ぶと聞かれたら喜んで菜飯を選ぶくらい嫌いだった。

東宮にいる時は、トモキや侍女三人が駆けつけてくれたし、船に乗っている時は兄が付いていてくれた。しかし、今は一人でこの恐怖に耐えるしかない。

つんざくような大音に、悲鳴を上げてしまう。両手で耳をふさいで丸くなくても、恐ろしい音は容赦なく鼓膜を突き刺す。

船は音をたてて、右へ左へ、上へ下へと妙な感覚と共に動く。

そうだ、お酒をのめば何とかしのげるかもしれない、と思いついても、酒瓶のある棚まで行くことができない。それでも、必死になつて寝台から降りた。

部屋を中心までよるめきながら歩を進めた時、かつて無いほどの爆

裂音が響いた。

「いやーっ！」

悲鳴を上げてうずくまる。と、船が音をたてて傾いだ。両手で耳をふさいでいるため、均等を崩してそのまま倒れてしまった。恐ろしさのあまり、涙が出てくる。体は冷や汗で濡れている。

その時、

「リウヒ！」

扉のあく音と共に、キジの声が聞こえた。

「キジ！ キジ！」

無我夢中で叫ぶとさすがは海の男、大揺れの中スタスタとリウヒの元までやってきてしゃがんだ。

「お前：なにやってんだよ、すごい悲鳴上げて」

風の勢いで、扉が大きな音をたてて閉まる。

ひイ！ リウヒが首をすくめた。

「とりあえず、こんな所で座り込んでないで、寝台に戻…」

再び、雷鳴の爆裂音が響いた。空気が振動する。

「ぎゃーっ！」

耳をふさいで丸くなる。ああ、今わたしはものすごい恰好をしているだろうが、そんなのは関係ない、早くこの音が去ってほしい。祈るような気持ちで震えていた体を、いきなり引っ張られた。何かと思う間もなく、気が付いたらリウヒの体はキジにすっぽりと納まっていた。頭を両手で抱えられている。

今まで外にいたのだらう、キジの体はびしょぬれだった。

怒りで目頭が熱くなる。

この男も、わたしの体が目的だったのか。信じていたのに。好みじゃないと言っていたくせに、兄と一緒にだ。このまま押し倒されて弄ばれるのか。身をよじると、さらに力を込められる。

「馬鹿、暴れるな」

それは上からではなく、キジの体の中から聞こえた。

「こうしとけば、少しはましだろ」

確かに恐ろしい音は、遠くでかすかに聞こえているだけだ。しかも男の手は自分の体を這ったりしない。ただ、恐怖から守るようにしっかりと頭を抱えてくれている。そして自分の頬は、その男の胸に強く押し付けられている。

「おれもさ、ここでこんなことしている場合じゃねんだよ」

怒ったような声とは裏腹に、腕の力は緩まない。

「ただでさえ今、人数少ないのにさ、船が沈んだらお前のせいだぞ」  
「じゃあ、わたしのことなんてほっといて」

「泣き叫んでる女をほっとく訳にはいかねえだろ、馬鹿」  
心臓がトクンと跳ねた。ああ、この人はなんて優しい。

それからキジは黙ってしまった。ただ雷鳴や豪雨の音が遠くに聞こえる。が、それ以上に聞こえるのは、キジの鼓動音だった。リウヒの耳に心地よく響く。

この場所はとても安心する。恐怖はすっかり去ってしまった。

目をつぶって、力を抜いていた両手を男の背中に回した。少しだけ力を入れて抱きつくと、キジも無言でリウヒの頭を抱え直した。しばらく二人はその状態で抱き合っていた。

「もう大丈夫だろう」

揺れが小さくなったころ、腕が緩んで体が離された。

「う、うん。ありがとう」

もう少しだけあの場所にいたいと思ったが、しぶしぶ離れる。

「しかし、お前は本当にやせっぽちだな。骨が痛かったー」

キジがニヤニヤ笑いながら腕を回す。悲しくなってしまった。やっぱりわたしはこの男の好みじゃないのだ。

「飯、残すからだぞ。ちゃんと食べて成長しろよ」

おやすみー。呑気に去ってゆくキジの背中を見送る。自分がこんなにごぎまぎしていたのに、まったく何事もなかったかのような男の態度。なんだか悔しい。寝台に飛び込んで寝転がる。

雷雨も船の揺れも、おさまってきた。おさまらなくていいのに。また雷が鳴ってくれたらいいのに。そうすれば、キジが駆けつけて抱

きしめてくれる。

兄は翌日、血相を変えて戻ってきた。

「悪かったね、一人にさせて。さぞかし怖い思いをしただろう」  
降り注ぐような口づけを受けながら答えた。

「ええ、兄さま。とても怖かった」

昨夜の事は言わなかった。言えはすぐさまキジを、遠ざけられてしまふ。

それは嫌だった。とてつもなく嫌。嘘も芝居も方便ということをし  
りウヒはここで学んでいる。

ああ、この船にキジがいてくれて本当に良かった。

## 図書の主

賄賂が功を奏したのか、三日三晩に及ぶ無言の要求——すしよ図書の門前に鎮座し続けるという——が認められたのか、トモキはついに図書の主に面会することを許された。

「まずは御身を整えください。立てマスカ？」

伝えに來た少女は、舌足らずな声でトモキに聞いた。黒目がちの大きな瞳を持った、可愛らしい子だった。

リウヒと同じ年かもしれない。そう思ったトモキの心が絞れるように痛む。

「大丈夫。ありがとう」

「あたしはすぐに戻らなきゃいけないのデ。終わりましたらあちらの扉からお入りください、デハ」

につこり笑って竹筒を差しだすと、少女は駆けるように図書へ戻って行った。後ろで一つに括った焦げ茶色の髪の毛が躍る。

竹筒の中は冷えた水だった。口を付けるとこくりと喉を通って、瑞々しく体の中へ沁み渡ってゆく。心遣いを有り難く思いながら、トモキは立ち上がった。長時間の姿勢に限界越えした関節が悲鳴を上げて、声が漏れる。

だけど、こんな痛み、何だというんだ。トモキは氣力を振り絞って歩を進める。

上層部に自分が入り込めないが、カグラが表におりシラギとマイムは裏で動いている。図書の主がどういう者だかはつきりとは分らない。それでも、トモキは望みに賭けた。例え薄氷のような儚い望みでも。

扉を開けると、そこは本の海底だった。辺りの壁という壁には巻物や書物が天井まで詰まっている。

ああ、懐かしい匂いがする。トモキは空気を吸い込んだ。宮廷に上

がった頃、カガミと過ごした自室の匂いだ。亡き愛すべきタヌキオヤジ。燃え焼けてしまった本に埋もれた二人の部屋。切ない思いを押し込めて、トモキはぐるりと辺りを見渡した。

本棚の一片に梯子はしこが架かっている。その上に女が一人、絶えず書物を引っ張り出しては下に落としていた。

落ちた書物は、先程トモキに声をかけた少女が見事な塩梅で受け取っている。いや、失敗して顔面に直撃を受けた。

「ワカや。大切な書を顔で受けたあ、あかんえ」

優しく柔らかい声は、何故か恐ろしげに聞こえた。

「ならば、上からポイポイ放らないでください。シキブサマ」

少女は果敢にも抗議する。が、聞き入れてもらえず、今度は頭上で本の直撃を受けた。

「ほんにお前は……、あれ、坊ぼんが迷い込んできたわ」

女と少女の視線がこちらに向いて、トモキは静かに頭を下げた。

「国王付従者、トモキと申します。図書の主さまとお見受けいたしました」

「いかにも、いかにも」

女は鷹揚に頷くと、するすると梯子を下りてきた。不思議な顔をしている。妙令にも老人にも見えるその顔からは年齢は伺えない。浮世とは全く異なった静謐な雰囲気放っており、一種の畏怖をトモキに与えた。

「座りや」

後ろでは少女が静かに室を出てゆき、しばらくして茶器を携えて帰ってきた。がっしりと鈍重な卓に慣れた手つきで温かい茶を入れてくれる。

「さつきはありがとう。これを」

竹筒を返すと、「ども」とちょこんとお辞儀をした。

「王の従者さんが何の用え。お手伝いでもしにきたんかえ」

名すら名乗らず、主ははんなり笑ってトモキを見据える。蛇えものが蛙に狙いを定める時、こんな顔をするのかもしれない、とトモキはちら

りと思った。

「陛下が行方知れずになっている事はご存知ですか」

「ああ、なんやえらい騒いではるなあ」

「あなたのお力をお貸しいただきたい」

「はあ」

単刀直入に切り出したトモキに主は訝しげに眉を寄せた。

「貸すも何も、うちはただの図書頭すしやがしらえ。まあ、地図やらなんやらやつたらお貸しますけど？」

「宮とは別の権力をお持ちしていると伺いました。即ち、宮外の力と繋がっているのではないかと思ひまして」

「アホらし。宮外の力ってなんやのん」

「例えば、……闇者とか？」

「まあ、ほほほほ」

可笑しくて堪らない、というように主は笑い転げた。後ろでワカと呼ばれた少女も苦笑している。

「従者さんの頭は思考が飛んどって面白おもろいわあ。残念ながら闇者なんて聞いた事も食った事もありやせん。せやけどなあ……ワカ」

少女を呼び寄せると、その耳にヒソヒソと何かを囁いた。ワカは二度頷いて再び元の位置に戻った。

「従者さん」

「はい」

「うちは宮に飼われるただの図書頭え。闇者なんて存在も知らんし、治外法権もあんさんに有益な情報ももっておりやせん。ただ、一つ言えるのは」

そこで主は言葉を切った。

「待ちや」

五日待て、と言った。

「知らせは必ず来はります。分かつたらさつさと出て行き。うちもいつまでも坊の相手するほど暇やないんえ」

ほんのり漂った友好的な声を一転させて、主は顎をしゃくった。心

得たとばかり、ワカがトモキを無理やり立たせる。

「さ、シキブサマが箒<sup>ほうじ</sup>持ち出して暴れないうちにご退室<sup>たいしつ</sup>ヲ」  
「分かりました」

目の前の女は、確かに噂どおりだった。口悪くともトモキに協力してくれるようだ。

「このご恩、けてして忘れません」

「宮廷のボンクラ共が」

少年が去った後、図書の主は忌々しげに吐き捨てた。

「小娘一人探し出すのに、何を手間取ってはんの」

「ヨドサンたちも苦労されているみたいデスネ」

卓上の茶器を片づけながら、ワカはそつなく答えた。

「何日かかるん？」

「五人出してくれるのなら、三日デ」

「大学、他国の動きはどないなえ」

「大学は今、陛下を失う訳にはいかないので、むしろ慌てているようデス。クズハ、チャルカは関知してこないでシヨウ。警戒すべきはジンですが、あそこの第三王子がティエンランに極秘で滞在しているそうなので問題はない、とお頭は言ってマシタ」

「ああ、あの病弱の皮かぶった放蕩王子」

わあ、ひどい。心の中でワカは呟いた。

「まあ、ええわ。ワカ、あの愛想のない男を呼んでき。新契約を結ぶ」

「はい」

「小娘を見つげ出すだけでええ。ボンクラ共も少しは働いてもらわんとな」

頷いたワカにシキブは微笑む。

「ジユズも便利なもんを紹介してくれたわ」

「シキブサマ。闇者を書庫整理に使うなんて、あなたくらいですヨ」

につこり皮肉を言つて、ワカは書物の壁の中に消えた。

闇者は高額な金さえ払えば、なんだってやる。殺しや情報操作など欲にまみれた依頼がほとんどで、こんな呑気な仕事は前代未聞だった。

ワカは足を早める。

うんざりして文句を垂れているだろう四人の仲間たちに早く伝えなきゃ。

## リウヒとキジとクロエ

海が遠くまで見えるからとか何とか言っているが、ここしか居場所がないのだろう、今日もリウヒは、いつもの所でぼんやりしている。  
「キジ」

振り向いて嬉しそうな声を上げる。こっちまで嬉しくなっちゃうじやねえか、とキジはほほ笑んだが、すぐに顔をしかめた。後ろからクロエの異様な目線が痛い。

ここ最近、キジとクロエとリウヒはよくつるむようになった。頭領もクロエだけだと警戒するが、キジが一緒だと何も言わない。いい親友をもったよなあ、とクロエの肩を叩いてやりたい気分だ。

「今日も叫んじゃう？」

おどけて言つと、リウヒは「今日はあまり大声だせない」と首をふつた。

その白い首には、赤い線が入っていて思わず息を呑む。何やっているんだよ、頭領。

「お前、大丈夫か」

「うん、加減はされているから」

そういう問題じゃあねえだろう。クロエも青い顔をしている。

「あのね」

リウヒは舐先にもたれかかって、遠くを見た。

「イヤッサイは意味不明だけど、ゴジョウはご豊穡って意味なんだつて。元々は漁師の大漁祈願の掛け声だったらしい」

「へえ、リウヒは物知りだなあ」

感心したキジに

「昔、歴史の教師が教えてくれた」

とひっそりと笑った。その笑顔はなぜかとても悲しげで、キジの胸がキュンとなる。

ああ、そうか。この娘は、男の保護欲と独占欲をそそのめるのだ。本人

にその気がなくても。

細い体も、白い肌も、流れる藍色の長い髪も、儂げな風情も、背が低いことすら。

現にクロエは、恋しています全開で！　って顔でリウヒを見ている。頭領にいたっては、すでに狂っているのだろう。

そしてこのおれですら、ときめかせる。こんな女、好みなんかじゃないのに。

あの嵐の夜。

悲鳴が聞こえた瞬間、キジはやるべきことを放りだして、リウヒの元に駆け付けた。泣き叫ぶ少女を抱きしめた時、自分の中にすっぱりと収まった体に驚いた。

まるで、どこかに置き忘れた自分の半身が戻ってきたような錯覚に陥った。

そして離れ難くなってしまった。だが、この娘は頭領のものだし、王さまだし、クロエの想い人だ。そう言いきかせて、無理やり離れた。しばらく心臓の動悸は止まらなかったけれど。

…こらこら、何を考えている、おれ！

キジは一生懸命、クズハのアイカちゃんの顔を思い浮かべようとしたが、白くばやけていてはつきり思い出せなかった。

遠くで頭領の声がする。リウヒを呼んでいる。

少女は立ちあがると、まっすぐ兄の元へ駆けていく。そのまま抱きあげられて部屋の中へ消えた。

手に入らないと分かっているから、余計ほしくなるのだろうか。

横の馬鹿は、泣きそうです本当に！　って顔をしている。

キジは振り切るように立ちあがって、伸びをした。

「さあて。お仕事、お仕事」

ふざけていうと、親友の腕を引きずって歩き出した。

\*\*\*

部屋の中、夕餉にて。かつきり兄を見据えてリウヒが声を上げた。

「兄さま、わたし、みんなのお手伝いをしたい」

アナンは驚き、茶碗を落とした。

「旅をしている時、仕事をしないものは飯を食うなど教えられた。

わたしは今、何もなくてぼんやりしているだけだ。だから、どんなことでもいいから、仕事がしたい」

「それはいい心がけだが…」

兄は眉を顰めた。

「狼の中に羊を一匹放つようなものだ。駄目だよ。危険すぎる」

「兄さまのケチ」

不満そうに鼻を鳴らす。

「リウヒは働かなくていい。ただわたしの横にいればいいんだ」

「でも、兄さまの仕事の時は、一人でほっておかれるもの。そんなの…」

暇で仕方がない、と続けそうになって、慌てた。

「…淋しくて仕方がない」

上目づかいで兄を見る。案の定、アナンは相好をくずした。

「ねえ、兄さま。お願い」

正直、飽いてきたのだ。舐先でぼーっとする事も、この部屋に閉じ込められるのも。

船の生活に慣れてきた証拠だった。兄の傍にるのが怖くなってきたのもある。最近、兄はおかしい。横にいればいいという。大人しく横にいるのに、なぜわたしを見ないと、首を絞めたり髪を引っ張ったり暴力を振るう。リウヒが泣いて悲鳴をあげると、今度は許してくれと抱きしめて謝るのだ。

そして何よりキジの近くにもっといたい。あの海賊たちの中で、キジは自分のお守役みたいになっている事をリウヒは知っていた。

「兄さま、お願い」

アナンはため息をついて、茶碗を置いた。  
「やれやれ、可愛い妹のお願いだ。ただし、何かあったら必ずわたしに言うんだよ」

\*\*\*\*\*

「で、何しに来たんだ」

意気揚々と、大部屋に降りてきたリウヒにキジは呆れた声を出した。

「手伝いに来た」

「なんの」

「なんか」

やることがあるなら言ってくれ、何でもする。と笑う少女に仲間たちは怯えている。この妹に万一のことがあったら、頭領が怒り狂うのは目に見えている。

お相手できるのはキジとクロエしかいなかった。

「あー、うん。じゃあ、食器洗いでもしてもらおうかな」

「分かった」

「おれも手伝う」

「お前、今から見張り番だろ」

鼻を膨らまして立候補するクロエを追い出して、リウヒを台所に連れて行く。

うず高く積れている食器、何が入っているのか分からない鍋、いたるところにこびりついている野菜や干し肉の屑、侵入者に慌てふためくネズミ。

「これは…あまりにもすごいな」

当てられたように少女は口を開けた。

「一緒にやるうか、どうせおれ暇だし」

キジが言うつと

「うんっ」

リウヒが嬉しそうに笑う。

思わずその頭をグリグリと撫でてしまった。少女はさらに嬉しそうに笑い声をたてる。

二人は早速作業に取り掛かった。

リウヒは意外に手際よく洗ってゆく。それをキジが拭いて直してゆく。

「おぬし、やるな？さては王というのは仮の姿だろう」

「ふふふ、よくぞ見破った。わたしの正体はそこにいるネズミだ」

「…それ、全然ちつとも全く面白くない」

「えー」

声をあげて笑う。

「しかし、本当にお前、王さまか？王さまってなんでも家来がやってくれるんじゃないの？」

「宮廷にいる時はやってくれたけど、外で旅している時は、働いたから。えっと、働かざる者食うべからずって言われて」

「いい言葉だな」

「わたしもそう思う。だから、いろんな仕事をした」

「どんな？」

港の荷揚げ、巻き割り、刺繍、店番、木の実取り、畑の収穫。

指を数えながらリウヒがあげてゆく。聞きながら、キジは目を白黒させた。

ねえ、この子本当に国王陛下？

そうこうしている内に、食器はきれいに片付いた。

「ついでにここも掃除してしまおうか」

油やカスがついた辺りを見渡して言う。しゃがんだ瞬間、リウヒの髪がサラサラと落ちた。

うっとおしそうに後ろにやってもなんどもこぼれおちてゆく。

「髪、括った方がいいぞ」

キジが、懷から紐をとりだすと、リウヒは背をむけた。括れという

ことなのだろう。

こういうところは王さまだよな、と内心苦笑する。

その髪を梳くと、えもいわれぬ快感が流れた。おいおい、たかが髪の毛だぞ。

しかし、それはしつとりと手に絡みついて流れてゆく。

ずっとこのまま、触っていたいような。恋人の髪に口づけをする愛情表現があるが、なんとなく分かる気がした。

一房とって、自分の唇にゆっくり運ぶ。目を閉じようとした瞬間、

「キジ？」

名前を呼ばれて、現実に戻った。お前の髪は何か括りにくい、と軽口でこまかしながら、小さなため息をついた。

\*\*\*\*\*

「今日は何をしていたんだい」

「食器をあらって、台所をかたづけた」

得意げに言う妹の額に唇をつける。まるでままごのように可愛いといえは怒るだろうか。

「明日もしたい。いいでしょう？」

嬉しそうに言うリウヒだが、アナンは心配で堪らない。飢えた男たちの中に大切な妹を入れるのは嫌だった。

「でも、みんなとても親切だし、楽しいもの」

ねえ、お願い。兄さま。手を合わせて、自分を覗き込む。

「キジは、まあいいとしてクロエが…」

「二人ともわたしの友達なのに」

友達。アナンは友達という概念がよく分らない。

常に自分は上に立つ身だった。宮廷時代は父である国王がいたし、海に来てからは先代がいたが、どちらにしても次を受け継ぐ人間と

して育てられた。以外は、臣下であり部下であり他人だった。自分の母親や弟でさえも。対等といえる人物はいなかったし、必要なかった。

友達、ね。

それは目の前で、黒い目で見つめてくる妹にとって、とても大切なものらしい。

仕方がない。愛する妹のお願いだ。アナンはため息をついて、不承不許可をだした。

\*\*\*\*\*

「お前って本当に不器用だな」

その言葉にリウヒは、ムツとしたようにキジを睨んだ。

「そんな事はない」

「あるよ！ 滅茶苦茶あるよ！ 原型留めていないじゃねえか、これ！」

リウヒの手から奪った衣を広げる。

「空いた穴を繕うだけなのに、何でこんなにぐしゃぐしゃになるんだ。袖まで縫うんだお前は！」

「あれ？」

「あれ、じゃねえよ。あーあー。ハルさん、泣くぞ」

「そこまでいったら、ある種の天才だな」

「えっ？ そうか？」

「クロエ、変に褒めるな。そしてリウヒ！ 得意げに鼻ふくらますんじゃないえ！」

ああ、もう馬鹿二人！ とキジは頭をかきむしった。

ちよくちよく大部屋へ「なんか手伝いに来た」リウヒは、みなに紛れて色んな雑用をするようになった。最初は怯えて怖がっていた仲

間たちも、慣れてきたらしい。嬢ちゃん、嬢ちゃんと気さくに声をかける。

それでも、やっぱりお相手をしているのは、キジとクロエだった。リウヒは、ほとんどそつなくこなしたが、料理と裁縫だけは壊滅的に下手糞だった。

少女がつくった夕餉を食した仲間たちは、一口食べた瞬間あまりの不味さに吐いた。それでも必死になって食べた健気な数人の男たちは、じんましん蕁麻疹で数日間苦しみ、のたうちまわった。勿論、クロエもその内の一人だ。

飯を握らせれば、米粒は可哀そうなご飯へと変貌する。

汁物をつくらせれば、鍋の中はどす黒い不気味な液体に変化する。

「おかしいな、なんでだろう」

「おれが聞きたいわ！」

裁縫はなぜか真つ直ぐ縫えない。糸を強く引つ張るのか、布が攣れて波うつている。しょっちゅう自分の指をさして、手を痛そうに振っている。しかも縫わなくていいところまで縫って、衣を台無しにする。

「おお、嬢ちゃんが、おいらのんぬってくれたんか。何か悪いなあ」  
齒が三本抜けた男、ハルさんが嬉しそうにやってきた。

「ハ、ハルさん、ごめん。こんななつちやった…」

「ああつ！ ハルさん、泣かないで！」

「糸を切れば、何とかなるから！」

「お前が悪い！」

「リウヒは悪くない！ 悪いのはおれだ」

「クロエは関係ないだろう。多分、この針が悪いんだ！」

「馬鹿！ 馬鹿二人！」

ぎゃあぎゃあ騒いでいる三人と、よほど気に入っていた衣だったのだろうか鼻水をたらして、泣いている男の横を、仲間たちが水を運んでいた。

「あれは何をやっているんだ？」

リウヒが不思議そうに聞いてくる。

「明日、甲板の大掃除をやるんだよ。その準備」

ハルさんお気に入り衣の糸を切りながら、キジはぶっすり答えてからハツとした。

案の定リウヒは嬉しそうな顔で、水を運ぶ男たちを見ている。

## 水かけ合戦

やっぱり来たか。

「キジー！」

甲板で水を撒いているキジに、リウヒが満開の笑顔で走り寄る。嬉しさ八割、諦め二割、そしてクロエの突き刺さるような視線を感じながら、ため息をついた。

「わたしもやる。何をしたらいい？」

「取りあえず沓ぬいで。水撒いて」

水を撒いてから平帚ほうきで磨いていくのだ。辺りには仲間たちが作業に当たっている。

手借と手桶を渡し、離れた。遠くから少女を観察する。

リウヒは大人しく作業をはじめたが、裾が邪魔なのだろう。おたおたし始めた。

キジたちの衣は粗末な綿でいくら汚れてもちつとも構わないものだし、みな下衣を巻くつて裾を端折ったり、からげたりして働いている。片やリウヒは毎日、上等なものを着ている。頭領が大切な妹の為に、陸で購入したものでや商船から奪った美しい衣を纏っていた。今日も薄い空色の衣に、茶色の帯を締めている。

女衣はどの国でも踝の辺りまで裾がある。農作業時はともかくとして、その先を見ることができるのは、閨を共にする時ぐらいだ。

どうするんだろうな、あいつ。

リウヒは首をめぐらして周りの男たちを見、ふんふんと納得したように頷くと、おもむろに両手で裾を持ち上げた。白い肌が膝上まで出現し、あまりのなまめかしさにキジは吹いてしまった。男たちも啞然として見とれている。クロエが鼻血を出した。

両裾を結び帯の中にいれた本人は、呑気に鼻歌を歌いながら水を撒いてゆく。

「アホかー！」

猛然と駆けよって、リウヒの藍色の頭をはたいた。ぽすんと音がした。

「キジ？」

「なんて恰好してるんだ！早く戻せ戻せ！」

「なんで？ みんな同じ格好しているのに」

「お前は女だろう！ 恥じらいつてもんがないのか！」

その言葉にリウヒはカチンときたようだ。

「キジもシラギと同じ事をいう。憤みがないとか恥じらいがないとか！」

ああ、シラギさんとやら。おれ、あんたを知らねえが苦労してんだろなあ。同情するぜ。

「とにかく戻せよ。目の毒だ」

「なにおう！」

いきなり水がかかった。驚き口を開けて、顔から水滴を滴り落とすキジに、リウヒが馬鹿にしたように言う。

「水も滴るいい男。なーんて」

ケラケラと笑うその顔めがけて、水をぶっかけた。呆然としているリウヒをみて鼻で笑う。

「お返しだ」

「やったな！」

身をひるがえして逃げるキジをリウヒは柄杓を振り回して追いかける。キジも逃げつつ応戦する。突如始まった二人の水かけ合戦に、仲間たちは呆気にとられて見ていたが、面白がつて観戦しだした。声を飛ばして大笑いしている。クロエだけが狼狽していた。

「二人とも、いい加減にしろよ！これも仕事……！」

そのクロエに、二方向から同時に水飛沫がかかった。

「お前は、本当に真面目な男だなあ。そう思いませんか、リウヒさん？」

キジがニヤニヤしながら、柄杓を振る。

「ええ、わたくしもそう思いますわ、キジさん。尊敬しちゃう」

リウヒが嫌らしく笑いながら、柄杓をクルクル回す。

「この…この…！」

肩を震わせている男の手に、桶と柄杓が渡された。

「いけ！ クロエ！」

「その怒りと悲しみを、あいつらにぶつけるんだ！」

仲間の無責任な煽りと、桶、柄杓をがっしと受け取ったクロエが叫ぶ。

「この馬鹿二人ー！」

キヤーキヤー喚きながら、逃げるリウヒとキジめがけて走りだす。

海賊たちは大爆笑して見物している。野次も次々飛んできた。

リウヒのひと際楽しそうな悲鳴が、船上に響いた。

\*\*\*\*\*

妹の悲鳴が聞こえる。

アナンは後甲板で幹部の男たちと話をしていたが、慌てて走り寄って甲板を見た。

そして思わず、あんどりと口を開いた。

男たちが見物する中、妹と二人の男が水を掛け合いながらはしゃいでいる。しかも愛する妹は、裾をまくってあられもない恰好だ。白い足が踊るように甲板を駆けまわっていた。

大声を上げながら、楽しそうに笑うその姿に一瞬見とれたのち、腹の底から怒りが沸いた。

自分には見せたことのない表情。自分には聞かせたことのない声。

それを惜しげもなく披露している。あのキジとクロエと部下たちに。

「馬鹿、こら、やめろって…ぎゃー！」

リウヒがクロエをはがいじめにして、キジがその頭に水をゆっくり

かけた。妹の細い足に、男の足が絡まっている。素肌で。

「その三人！」

遊んでいた三人は、跳ねるように飛び上った。部下たちはそそくさと掃除を始める。

手を招くと、お前のせいだ、キジが悪い、おれは注意したのに、と小声でお互いを責めながらうなだれてやってきた。

「遊んでいないで、きちんと掃除をなさい。これも仕事だよ」

「すみません」

「ごめんなさい」

三人は揃って頭を下げた。

甲板に戻るように、と男二人を返すと、リウヒも後に続くこうとする。

「お前はこちらにおいで」

「えっ…でも…」

戸惑う妹の手をひっぱって、部屋の扉を開ける。

「でも、兄さま、わたし、みんなのお手伝いを…」

「それはもう禁止だ」

そんな。目を見開いて自分を見つめる瞳は、黒真珠のようだ。

「当たり前じゃないか、こんな恰好をして、わたしが心配すると思わないのかい」

「だって、みんな同じ格好を…」

アナンは深いため息をついた。無頓着にもほどがある。もう、あの部下たちの中には金輪際入れるものか。

「手伝いはもうするな。大部屋にも降りるな。いいね」

「そんな兄さま、お願い。二度とこんな恰好はしないから」

縫るように抱きついてくる。水に濡れたその体はひんやりと冷たかった。衣が素肌に張り付いて艶めかしく見える。この姿を男たちは見たのだ。怒りは瞬間的に頂点に達した。

「わたしの言うことが聞けないのか！」

勢いのまま頬を打つと、リウヒは音をたてて転げた。打たれた場所を押さえながら、恐怖に目を見開いている。妹の怯えた姿を見て、

怒りは一気に後悔へと変わった。

いつもそうだ。自分の感情をうまく制御できない。リウヒに関しては。

「ああ、リウヒ。すまなかった、わたしを許してくれ。食器を下げることは許可しよう」

近寄ると逃げるように後ずさりする。再び感情は、後悔から怒りへと変貌する。わたしは悪くない、この妹が悪いのだ。謝っているのに、なぜ怖がる。白い首へと手が伸びた。

部屋に漂う静寂は、その内苦しそうな呻き声と嗚咽に取って変わられた。

## 王の所在

ある日を境に、宮廷には様々な情報が舞い込むようになった。

一般の目撃者や暗部からも絶えず報告は続く。その度に重鎮たちは色めき立ち、翻弄されたが、宰相は一つ一つを丁寧吟味し外部の口止めを徹底した。

ちょっとした騒ぎが起こったのは、秋風が頬を撫でる頃である。

カグラはほとんど駆けるように足を速め、本殿の一角に向かっていった。目指す室の中から怒鳴り声がする。

「なぜ、お前はそれを止めなかったのだ！」

怯える声、諫める声、宥める声が続く。

音を立てて扉を開けると、丁度シラギが商人風情の男の胸ぐらを引っ掴みながら、血気盛んに詰め寄っている最中だった。数人の大臣たちが狼狽したようにシラギを抑えてはいるが、怒り狂っている大男に縋っているようにしか見えない。

「何があったのです」

顎髭を撫でながら我関せず、とばかりに見物をしてる中將軍ダイゴに聞くと、

「陛下のご所在が判明したようで」

と小声で説明を始めた。

「あの御仁がクズハの酒場で陛下を目撃したらしい。男の膝の上に乗っておられたそうだ。その男というのが、どうやら元王子というようで」

「元王子……アナンさまですか」

腑に落ちない。カグラは先の騒動の時、実際にアナンと行動を共にしている。人柄は理解しているつもりだ。まさかアナンに限って。それとも何か考えがあつてのことか。

「人違いではないのですか」

「赤茶けた髪の子は星の数ほどおります。深い緑の目をした男も星

の数ほどおります。ですが海賊黒蜥蜴の頭領はお一人しかおりますまい」

「成程」

「ひッ！」

悲鳴が聞こえた。

哀れな商人は乱暴に胸ぐらを揺さぶられ、恐怖のあまり縮こまっている。カグラは溜息をついてシラギを商人から引っぺがした。

「先程の言は嘘偽りないか」

宰相の言葉に商人は禿げた頭に汗を光らせながら、コクコクと必死に縦に振った。

「一行がどこへ向かったのかはご存知ですか」

カグラの問いに今度はプルプルと首を横に振った。

「いえ、出港したくらいしか……」

「ご足労、ありがとうございました。大変助かりました。これは心ばかりですが」

銀三十枚を渡すと、商人は恐縮して押しいただいた。

「この事と、ここでの出来事を他言しないように。すればどうなるかご存知ですね」

商人はカグラの不気味な微笑みに怯えたように、何度も頭を振った。転がるように去ってゆく。沈黙が降りた。

「今現在は、アナンと共にどこかの海上にいるわけですね」

「アナンさまと共におられるならば、陛下はご無事のはずです」

絞るような声でトモキが言う。ああ、お前もいたのか、とカグラは今更ながら気が付いた。

「ぼくは実際にあの船で、アナンさまの下で働きました。みんな、すごくいい人たちだったし、きっと何かお考えがあつて……」

「ならば、なぜ酒場で陛下を膝上に乗せなどする」

シラギの低い声にトモキは黙った。

どちらにせよ、アナン本人をとっ捕まえなければならぬ。

仮に何かの事件に巻き込まれてリウヒが保護されたとしても、なぜ

さつさと宮廷に送り届けない。

「わたくしは、これからスザクに向かいます。連絡は一日おきに馬を飛ばします。船で海を重点的に探します」

重鎮たちが揃って頷いたのを見届け、退室するカグラを追いかける足音が聞こえた。シラギだった。急くように横に並ぶ。

「わたしも行こう」

「あなたが来てどうなるのでしょうか」

カグラが振り返る。

「海上はわたくしの管轄です、あなたはあなたの仕事を為すべきだ」

「陛下が浚われたのは、わたしの責任だ。だからスザクに……」

カグラの手が拳がる。それは音を立てて隣の男の横面を払った。

「いい加減になさりなさい！」

二人を追っていたトモキの目が見開く。銀髪の男はそのまま廊下の壁に黒髪の男を勢いのまま押し付けた。

「あなたは今の自分の立場をお分かりのはずだ。それを無視して行動すればこちらにも迷惑、ひいては陛下の御心を苦しめる結果となるのは目に見えているでしょう」

「……陛下を」

シラギは打たれた状態でしばらく止まっていたが、うなだれたままカグラの襟を掴んだ。

「必ず取り戻してくれ」

「お任せください」

その肩を、二、三回叩いた。

「必ずや」

ああは、いったけどどうしようか。カグラは思案しながら廊下を歩く。

宮廷の海軍は、いたって弱い。対しアナン率いる海賊は、数々の修羅場を潜りぬけた猛者だ。木の枝のみで熊に挑むようなものだ。しかし、逃げ足には自信がある。ということは、素早さがある。そこ

を徹底的に伸ばすしか手はない。

「カグラさま！」

トモキが駆けてきた。

「ぼくも一緒に連れて行ってください！ リウヒさまに約束したのです、逃げたら必ずぼくが追いかけて、捕まえるからって。あの海賊船にのっていたことだって、きつとお役に……！」

まくし立てるトモキにカグラは首を振った。

「あなたはここにいて彼らの動きに気を付けていてください。海千万山千万の重鎮たちです、どんな動きがあるのか分かったものではない。それに……」

困ったようにカグラは微笑んだ。

「シラギの様子を見てください。あの男がどこへ突っ走るか分からないではないですか。すみませんが、黒將軍のお守りも頼みます」トモキはしばらく、縋るような目でみていたが、諦めたようにため息をついた。

「……分かりました。手のかかる黒將軍さまですね」  
「全くです」

二人は顔を見合せて、苦笑した後別れた。  
スザクへ向かう前にと、稽古場をのぞく。マイムが後輩たちを指導していた。

カグラに気が付き、そのまま練習するようといって、窓から顔をのぞかせる。

金色の髪が、さらさらと落ち、静かに風にそよぐ。

「どうしたの。こんなところにくるなんて、珍しいじゃない」

「陛下が見つかりました」

マイムが息を呑む。

「しかもアナンと一緒にらしい」

「無責任王子が妹を浚ったってこと？」

さすが話がはやい。言い方はひどいが。

「これから、わたくしはスザクに行きます」

「気を付けてね、左將軍さま。死んだら浮気するわよ」

につこり笑ってつれない事をいう恋人に苦笑すると、口づけた。

「わたくしが死ぬ玉だと思えますか？」

「憎まれっ子、世に憚る。全然思わない」

もう一度、金色の頭を引き寄せ今度は深く口を合わせた。そして枯れ葉を散らしながら歩いて行った。

マイムはしばらくその後ろ姿を見送っていたが、振り返ると怒鳴った。

「見てんじゃないわよ、さっさと練習しなさい！」

## 絶望

暗い船内の大部屋の隅っこで、男たちが車座になって座っていた。中心には蝋燭が一本、頼りなげに灯りが揺れている。その中に夕餉を下げに来たりウヒもいて目を爛々と輝かせていた。ちよつとだけと座った少女の横にはちゃっかりクロ工が陣取っている。

「そんな訳ないんだよ、おれ一人だけだったから」  
男の低い声がする。

「その時だ」

みなは固唾をのんで続きを待った。

「後ろから、ぺたっ、ぺたっ、ぺたっ……と足音が……」  
ぺたっ、ぺたっ、ぺたっ……。本当に足音が聞こえた。全員、固まった。

「なにしてんの」

「ぎゃーっ!」

暗闇に浮かぶキジの顔を見てリウヒが悲鳴を上げた。

男たちはその声に、仰天して飛び上がった。

「じ、嬢ちゃん、驚かすなや!」

「うおー、びびったー」

リウヒはよほど恐怖だったのだろう、アワアワと震えている。クロ工がその体を抱きしめると、縋ってきた。

ああ、駄目だ。おれ幸せ……。

「嬢ちゃん、もう大丈夫だよー」

「ほーら、灯りもつけたしさー」

大部屋の灯りがついて、男たちがあやすように声をかけてもなおも震えている。

「お前がくるからだろう!」

「えええ、おれー?」

キジが責められていた。その恐怖をなだめようと、男たちはなぜか

赤ちゃん言葉でリウヒに声をかける。安心させようと手を伸ばすものはクロエの防御に阻まれた。

ようやく落ち着いたらしい。

「あの、ごめん。もう大丈夫だから……」

そう言つて必死に自分から離れようとする。

「まだ、震えている」

誰が離すものか。

その時、部屋の扉が大きな音をたてて開いた。

「リウヒ！」

腕の中の少女が、弾かれたように立ちあがる。

「に、兄さま」

アナンに向かって駆けていく。

「ごめんなさい。今、みんなで怪談を……あつ！」

髪を掴まれ声を上げたリウヒは、そのまま扉の向こうに消えてしまった。

みな、呆然とそれを見おくり、ため息をついた。

「頭領、どうしちゃったのかな……」

「昔はあんなじゃなかったのに」

もつと男の中の男つて感じだったのに。

「嬢ちゃんは妹なんだろう」

酒が回つても誰も以前のように歌ったり踊ったりしない。

「一国の王さまなんだろう」

陽気に騒げなくなってしまった。

クロエは自分の手をじつと見る。

助け出してあげたい。アナンの元から。そして、そのまま二人で……いきなり頭をはたかれた。

「痛い！何すんだよ」

「別に。何となく」

キジは鼻を鳴らすと横に座った。

「おれさ、あの子を逃がそうと思うんだ」

酒に口をつけながら、一点を睨みつけるように言う。

「今は無理だけど、今度、陸に上がった時に……」

「なんでそんなこというんだよ」

この男はリウヒに興味がなかったはずだ。情にほだされたのか。それともまさか惚れたのか。

「そんなんじゃないよ」

その時、上から何かが壊れる音が聞こえた。頭領の部屋だ。

クロエが立ちあがると上を睨みつけて走っていきこうとする。その腕をキジが掴んだ。

「離せよ！」

「お前が行ってどうなるんだよ」

もがくクロエを引き寄せる。

「今行っても、火に油を注ぐだけ……」

痛々しい顔でクロエを諭していたキジは、少女の悲鳴が聞こえた瞬間、クロエを放り出して一目散に扉へ駆けて行った。

「キ、キジ!？」

クロエも慌てて後を追う。

「おいらたちもあいつらに協力しよう、嬢ちゃんを逃がしてやろう」  
ハルさんが声を上げた。全員が頷く。

「嬢ちゃんは帰るべき所がある」

「頭領も正気に戻るかもしれない」

今度は、何かが壁にぶち当たる音。男たちは、沈痛な顔をして上を見上げた。

\*\*\*

髪を勢いよく引っ張られ、痛みの余りリウヒは悲鳴を上げた。分からない、どうして兄はここまで暴力を振るうのだ。わたしはクロエから離れようとしたのに、ほんの少しだけ、あの輪の中に入っただ

けなのに。

「兄さま。やめて」

首をゆっくり締め上げられる。

「やめ……」

「あの男たちに二度と近づかないと約束したらね」

その声は、不気味なほど優しくかった。夢中で首を振る。

兄の手はそのまま下に降りて、衣の襟をつかみ思い切り両横に広げた。衣が音をたてて裂かれる。

「これからは部屋を出てはいけないよ」

舌が這ってゆく。

「勝手に出たら」

肩を思い切り噛まれた。思わず悲鳴を上げる。

「二度と逃げ出せないように、足を切ってしまう」

リウヒは戦慄した。この人は本気だ。ここから逃げ出したら本当に足を切られてしまう。

兄は狂っている。その事に下の人たちは、怯えて怖がっている。わたしがいるから。

「お前はただわたしの横にいただけでいい」

では、わたしがいなくなればいいのかもしい。自分の存在が消えれば、全ては正常になるのかもしれない。キジたちにも迷惑がからなくなる。

「兄さ……」

いきなり扉がけたたましい音をたてて開いた。リウヒは驚き身をすくませる。鍵は開いていたのか。

「頭領！」

「その子を離せ！」

キジとクロエの声だった。兄に飛びかかろうとする。

「うるさいね、君たちは」

兄は振り向きざま渾身の一撃をクロエに浴びせた。クロエの体が壁に勢いよくぶつかりそのままぐったりと動かなくなった。

「クロエ！」

キジの手をかわしたアナンはその胸倉を掴んで、スタスタと扉を出てゆく。キジはもがいたが手は緩まなかった。リウヒは慌てて後を追う。そして息を呑んだ。

兄が手すりから腕を伸ばしている。その腕の先にはあがいているキジがいた。

「二度と妹に近づくな。それともこのまま海に落ちるかい」

「兄さま、やめて、その人を殺さないで！」

衣がはだけているにも関わらず、リウヒが転がるように甲板にでると兄に縋った。

「お前はこの男を庇うのか」

手を振り払われて尻持ちをつく。

「リウヒ……！」

キジが苦しそうな声を出した。

「お願い、兄さま。何でも言う事を聞きます。一生あなたの横にいるから！」

リウヒはもう必死だった。兄の足にしがみついて懇願する。

「何でもするから、その人だけは殺さないで……」

「わたしの妹はなんていじらしい」

歌うようにアナンは言うど、腕を巡らせてキジを甲板に思い切り叩きつけた。

「ぐっ……！」

「キジ！」

駆けよろうとするリウヒを抱き上げ、アナンは低い声を出す。

「今回は、妹に免じて許してやるが、次は躊躇なく海に叩きこむからね」

あの苦しそうに体を折っている男の元に駆け寄りたい。それでも自分はこの腕の中から抜け出すことができない。

兄には何もかもが敵わない。リウヒは遠ざかるキジを見ながらついに暗闇に堕ちた。

\*\*\*

リウヒはあれから、全く姿を現さなくなった。きっと部屋に閉じ込められているのだろう。つい、いつもいた舐先に目をむけてしまうが、無人だった。

頭領はいつもと変わらない。普段通り朗らかで爽やかだ。それが余計に怖かった。クロエは打撲による高熱をだした。うわごとのようにリウヒの名を呼ぶ男に胸が引き攣れた。自分は口を切っただけだ。お互い骨を折らないだけでも、海に叩きこまれなかっただけでもよかったじゃないか、と思う反面、リウヒの自由を奪ってしまった後悔が残る。

結局は、火に油を注いだけだったのだ。分かっていたのになぜ自分はあることをしてしまったのだろう。

ある日、頭領に呼ばれた。

「左舷の切りの調子がおかしいから見ておいてくれないか」

「分かりました。……あの、リ……嬢ちゃんは元気ですか」

おそろおそろ聞いたキジに頭領は笑顔で答えた。

「もちろん元気だよ。毎晩可愛い声で鳴いてくれる」

爽やかな笑顔のまま言う。

「わたしの下でね」

寒気がした。改めてこの兄妹関係のおぞましさに。

言いつけられた仕事をしながら、ふと思う。あの時の顔が頭から離れない、頭領はどんどん狂っていつている。どんなになっても、あの男はおれたちの頭領だ、それはゆるぎない。だがリウヒがいるかぎり、どこまで狂ってしまうのか分からない。

キジはふと上を見上げた。海鳥がのんびりと空を旋回している。やっぱり、あの子はここから出してやらなきゃ。

\*\*\*

「わたしは明日用事があつて出るが、大人しくしているんだよ」

「はい。兄さま」

「いい子だ」

妹の髪を梳きながら、口づけるとリウヒは目を閉じた。

あれから、妹は意思を無くしたように静かになった。従順になった。まるで人形のような。右を向けと言えば、いつまでも右を向いているような。

これが自分の望んだことなのに、なぜ不安は去ってくれないのだろうか。どこかますます大きく巨大になってゆく。その苛立ちは、リウヒに向かう。どんなことをされても、妹はもう泣いたり怯えたりしなくなった。ぼんやりと受けているだけだ。それが余計にアナンを苛立出せた。

白く華奢な体には痣があちらこちらに残り、口の中は常に鉄の味がした。

「兄さま」

リウヒが体を持たせかけながら言う。

「舐先から遠い海原が見たい」

「駄目だ」

緋色の衣が大層、似合っている。商船から奪った極上の衣だ。藍色の髪にも、白い肌にも。

その裾からのぞく細い足は、白く頼りなくて本能をそそられる。足を取って指を含む。一本一本、丁寧に舐めてゆく。

「あ……」

目を閉じて、快楽を味わうように歪む顔がさらに欲情を煽る。

「二度と部屋から出てはいけない」

「はい、兄さま」

ゆっくりと白い両足を広げると、うるんだ目でこちらを見つめている。

ああ、その瞳に映るのは、わたしだけでいい。

身を沈めると妹の声が上がった。体が溶けるような、高く甘い声だった。

## 希望の灯 1

翌日、頭領が船を降りた隙に、迷った末、キジは体を屈めて頭領の部屋へ侵入した。

ちよつとりウヒが心配なただ、ただそれだけだと思いながら。念のためハルさんに、見張りをお願いする。

「酒一本でいいかな」

「酒も金もいらんよ。おいらも嬢ちゃんが心配だ、無償で協力してやるさ」

「わりいな、ありがとう」

勿論、鍵がかかっていたが、お茶の子さいさい、針金で鍵を開ける。「リウヒ。返事しろ」

声をかけながら部屋に入ると、寝台で少女が横たわっていた。緋の衣から伸びている白い手足には、青や紫の痣が所々にあった。藍色の長い髪が寝台に散っている。

「キジ」

自分をみても、まるで人形のようにぼんやりしている。唇の端が切れていた。

「お前……大丈夫か？」

「キジこそ大丈夫なの？」

白い手が伸びて、寝台の前に跪いたキジの頬を撫でる。ゆっくりと愛おしそうに。

「おれは、口を切っただけだから。でもクロエが熱をだして、お前の名前を呼んでるんだ。そうだ、大部屋に来てくれないか、ちよつとだけでいいから」

クロエもリウヒに会えば、少しは元気になるかもしれない。

細い体を抱き起こそうとすると、身をよじって嫌がった。

「この部屋から、わたしを連れださないで。兄さまに知られたら、足を切られる」

頭領、どこまで狂ってんだよ。

「そうか」

体を離すとリウヒの顔が歪んだ。

「ごめんね」

「なんでお前が謝るんだよ」

「キジとクロエに迷惑かけた。クロエに伝えて。かばってくれて、ありがとうって」

「おれもクロエも、迷惑なんて思っちゃいねえよ」

頬にかかっていたその手を取ると自分の指と絡ませた。リウヒの白い手は、華奢で小さく、日に焼けてゴツゴツしたキジの手とは対照的だった。

「キジもここを出て行つて。わたしは狂っているもの。キジを襲ってしまいかもしれない」

「本当に狂っている奴は、自分の事狂っているなんて、いわねえぞ。お前が襲ってきたら、その時はおれがまた頭をはたいてやるさ」

リウヒが笑う。

「ねえ、キジ」

リウヒはうつ伏せになって、髪の間から絡まる手を眺めている。  
「ん？」

白い指は、日に焼けた手を愛撫するようにいじっている。

「どうして、あの時来てくれたの」

兄さまが普通の状態じゃないって分かっていたでしょう。

「決まってるじゃねえか、馬鹿」

キジが微笑んだ。

「泣き叫んでいる女をほっとく訳にいかねえだろう」

「本当にキジは優しい人」

あのね、キジ。

「キジがいなかったら、わたしはとっくに狂っていたと思う」  
まるで踊るように小さな手は絡まってゆく。

「キジがいて、すごく楽しかった」

クズハの客室での拳骨、嵐の夜、船の先端から叫んだこと、台所の掃除、クロエと一緒に甲板でしゃべったこと、いろんな雑用、ハルさんの衣、水かけ合戦。

「迷惑かけてごめんね」

そのまま、キジの手を引きよせる。そしてごつごつした手に唇を落とした。

「ありがとう、キジ」

「お前、まさか、まさか……」

手を振り払って、立ち上がる。

「死ぬ気じゃねえだろうな！」

リウヒは無言でキジを見上げたが、黒い瞳に否定の色は無かった。

「馬鹿っ！」

キジの拳が藍色の頭に落ちる。ゴツと音がした。

あまりの痛みにリウヒが頭を押さえて体を折った。

「痛い……」

「痛いじゃねえ！この……この大馬鹿者！いいか、自殺なんて、最っ低の卑怯者がすることだぞ！世の中にはお前より、散々苦しんでいる奴がいっぱいいるんだ。絶望に喘いで、それでも必死に生きている奴がよ！己の不幸を嘆く前に、打開策を考えろ！」

「そんなの、わたしだって散々考えた！」

痛みと怒りにリウヒが涙目になって、勢いよく起き上がった。

「でも、兄さまには全く敵わなかった、もがけばもがくほど締め付けられる！」

「それで流されて大人しくいいなりかよ！弱っちい女だな。拳句の果てに命を断とうとする。どこぞの旅芸人の芝居みたいだ」

吐き捨てるようにキジも応ずる。

「安くて陳腐で吐き気がするぜ」

人間、凶星を突かれると逆上するらしい。リウヒの髪が逆立った。

「バカバカバカバカ、キジの馬鹿——！」

泣きながら、物をやたら滅多らに投げつけてきた。

「おい、こら、それは反則……ぶふっ！」

枕の直撃を受けた。

「どうしたんだ、キジ……うおう！」

心配して扉から顔をだしたハルさんの横の壁に、小刀が突き刺さった。

「ちよつと、今……忙しい、後で声かけて！」

物理飛行攻撃にいつぱいいつぱいのキジが怒鳴ると、ハルさんは慌てて引っ込んだ。

「落ち着け、リウヒ」

「わたしは落ち着いている」

肩で息をしながら、血走った目は室内を見渡している。投げられるものを探しているのだらう。何かを見つけて走り寄ろうとした瞬間、音をたてて蹴躓いた。

「ああ、ほらもう、いわんこつちやない……」

「離せ、馬鹿！ 馬鹿キジ！」

抱え上げるとジタジタと暴れたが、すぐに力尽きて大人しくなった。

「おれはな、リウヒ」

寝台に連れ戻し、自分もその端に腰を下ろす。

「今回は言いすぎたとは謝らねえぞ。もう一度言つ、自殺は最低の卑怯者がやることだ」

リウヒはふてくされたように横を向いていた。

「残されたものを考えてみるよ。おれ、クロエ、頭領、お前の仲間、宮の人間、いやティエンランの国民全員が、悲しみと失望のどん底に叩き落とされるんだぞ。お前、王さまだらう」

キジの言葉と共にリウヒが目を見開いてゆく。

「王さま……」

「おれは、親友が……」

「キジ、キジ！」

リウヒが勢いよく抱きつき、不意を突かれてキジはひっくり返った。「ちよつとまでこら、ここからがいいところ……きゃー！ おれ、

襲われてる！ 貞操の危機、貞操の危機、ダレカタスケター！」

リウヒはわめくキジに構わず、頬に口づけをすると、その体を思い切り抱きしめた。

「痛い！ おま、結構馬鹿力……！」

「ありがとう、キジ。目が覚めた」

キジはわめくのをやめて、横に張り付いているリウヒを見る。

リウヒが顔をあげてキジを覗きこんだ。その黒い瞳がキラキラ光っている。

「キジが、わたしの人生の中にいてくれて、よかった。本当によかった……」

「それ、すごい殺し文句……」

至近距離で見つめあう。キジの手がリウヒの頭に回った。ゆっくりと自分の方に引き寄せる、リウヒも真っ直ぐそこに向かってくる。

お互いが目を閉じ、唇が触れた。

その瞬間。

「キジ！ 頭領が帰ってくるぞ！」

扉が慌しく叩かれた。二人は弾かれたように離れ、リウヒは勢い余って寝台から転げた。

「やべ！」

キジが慌てふためいて起き上がる。うろたえている男を見て、寝台に頭を持たせかけながら、リウヒが呑気に言った。

「なんだか、間男を見送る気分だ」

「なに寝言いってんだよ。どうすんだよ、この部屋」

先ほどリウヒが怒りにまかせて投げつけたものが散乱している。

「キジが片づけて、わたしは動けない」

「馬鹿。自分で散らかしたものは、自分で片付けろ」

ぼすんと藍色の頭をはたく。

「じゃあな、リウヒ。元気になってよかった」

「ありがとう、キジ。大好き」

笑顔を一つ残して、キジは部屋を出、部屋の前に立っていたハルさ

んに声をかけた。

「頭領はどれぐらいで帰ってくんのだ？」

「もうすぐ着く。なあ、嬢ちゃんは……」

「いや、なんだか滅茶苦茶に元気になってしまった」

針金で鍵をかけながら、苦笑した。

「ありがとな、ハルさん」

「いいってことよ」

「さて、と。おれ、ちょっと舐先で一眠りしてくるわ」

呑気に手を振って舐先へふらふらと向かう。

いつもリウヒが座っている場所へ、崩れるようにへたり込むと、頭を抱えてもだえ始めた。

うおおう、やべえ。あの時声がかからなかったら、そのままいつちやってたぞ、おれ。

……。

いや、いつちやいたかったな、むしろ。

いやいやいやいや、何を考えてるんだ、おれは！

両手で頭をかきまわし、唸り声を上げる。

——キジが、わたしの人生の中にいてくれて、よかった。

——ありがとう、キジ。大好き。

畜生、可愛い声で頭ん中、クルクルまわるんじゃねえ。

両足をばたつかせて、多々良をふんだ。近くの小樽を思い切り蹴飛ばす。

ああああ、もう。どうしたおれの心臓！ 静まれおれの心臓！  
キジの奇っ怪な行動を、空を飛ぶ鳥たちが無関心に眺めていた。

## 希望の灯2

海と空の見える窓まで這ってゆき、窓枠に手をかけて力を入れて立ち上がったリウヒは遠い海原を眺めている。

最近、体に力が入らず、歩くことも難しかった。筋肉が衰えているのだろう。体の節々や痣が痛む。

キジのお陰で目が覚めた。ああ、本当にわたしは馬鹿者だ。

すべてを放棄していた。国のことも、宮廷へ帰る願望も、考えることも。キジ、クロエや海賊たちと過ごした楽しい時間でさえ、取り上げられてしまった。

それからは、生きることさえ投げ出していた。

自分さえ死ねば、世界はきちんと機能しはじめる、そんな気がしていた。

兄は正氣に戻るだろうし、海賊たちもそんな兄におびえることもなくなるだろうし、クロエやキジにも迷惑がからなくなる。

アナンに報復する気持ちもあった。この苦しみを、わたしの死によって思い知るがいいと。

——ティエンランの国民全員が、悲しみと失望のどん底に叩き落とされるんだぞ。

お前、王さまだろう。

キジの声が響く。

ああ、本当にわたしは馬鹿者だ。大切な責任を、楽になりたいあまりに忘れるなんて。

大切な民を悲しませることなんて、できない。三百年続いた王家をわたしで途絶えさすことなんて、できない。ティエンランを、わたしの国を不幸にさせることなんて、できない。

わたしは王なんだから。

上意の礼をした時、わたしは国民になんと誓ったか。

生きなくては。生きて宮に帰らなくては。汚れきった体でも、わた

しは宮に帰らなくては。  
みんなのもとへ。アナンなんかに負けるものか。

\*\*\*

アナンは室内に入って驚いた。部屋のいたるところに物が散乱し、いつも寝台にいる妹は窓辺に立っている。

「おかえりなさい、兄さま」

こちらを向いて、ゆつくりと微笑んだ。

死んだような人形の表情はなく、光を受けてキラキラと生命力にあふれている。

「どうしたんだい、リウヒ。そんな所に立って。それにこの有様は

…」

思わずうつろたえた声が出る。扉の横には小刀が刺さっていた。

「まさか、誰かが侵入したんじゃないだろうね」

「癩癩をおこして、物にあたり散らしてしまいました」

妹に手を伸ばそうとすると、すいと逃げる。

「だって、淋しかったんだもの」

詰るように黒い瞳で睨みつける。

「すまなかった、一人にして」

「いいえ」

ふいと目線を逸らせた。窓の外をじつと見ている。

「ここはどここの近くの？」

「ジンだ」

「行きたいな」

「陸地についても、お前を下ろさないよ」

後ろからゆつくり抱きしめると、その体が僅かに硬直した。

「お前はこの部屋から出てはいけけないのだからね」

「分かっています、兄さま」

妹は微笑んで、身をよじると兄に口づけた。

\*\*\*

兄が呆然としたように、自分を見ている。

「本当にどうしたんだい」

「どうもしていません」

リウヒは咀嚼をしながら、茶碗を差し出した。

「おかわり」

「これで四杯目だよ……」

体力をつけないと。歩くのが困難であれば、いざというとき動けない。時期が目の前にきている時に、指をくわえて見送るのは嫌だった。

幼少期、どんなに絶望していても、食事だけはきちんと食べた。いざ逃げる為に。機会を逃さない為に。

母さんが言ってたもの、ご飯は大切だって。ちゃんと栄養をとらなければ、肉体は衰えて闇に囚われたままになってしまう。幼いころは本能で分かっていたことが、今は全然分かっていなかった。本当にわたしは馬鹿者だ。

「もうやめておきなさい」

「どうして？ わたしがふくよかになっても、兄さまは、愛してくれるでしょう？」

アナンは一瞬詰まったが、もちろんだよ、とほほ笑んだ。

「ああ、でもそうになったら、キジにもてちゃう」

笑ったら、さっさと食器を下げられてしまった。

ごちそうさま、と手を合わせて立ち上がる。それでも真っ直ぐに歩けなかった。ふらついて倒れてしまう。

体力をつけないと。ちゃんと食べて、歩く練習をして、走れるようにならないと。

わたしは宮に帰るのだ。一点を睨みつけるリウヒの目は、燃えるような決意に溢れていた。

## 脱出

クロエの目線を辿ると、舳先をぼんやりと見つめていた。藍色の髪  
の残像を追っているのだろうか。熱が下がってやっと外に出られた  
というのに、今度は使い物にならなくなってしまった。それでも誰  
も何も言わない。キジが声をかけようとした時。

「なんだありゃあ」

見張り台の仲間が大声をあげた。その方向を見ると、中型の船が二  
隻、それを取り囲むように小型の船が六隻ほどこちらに向かつてく  
る。

その帆に描かれているのは宮廷の紋、赤い鳳凰。

「ティエンランの宮廷海軍！」

かの有名な弱小海軍！ 仲間は騒然とした。これを機会に嬢ちゃん  
をあちらに引き渡して……、いやどうすればいいんだ、頭領は鼻で  
笑って立ち向かうに決まっている。

案の定、アナンは一笑で片付けた。

「しゃらくさい、軟弱海軍が。砲を叩きこんで脅かしてやれ」

仲間たちは戸惑いつつも、砲の準備を شدした。にわか慌しくな  
る。

海軍は恐るべき速さで、こちらに近づいてくる。そしてある程度の  
距離になると、二手に分かれた。小型船は二隻ずつ、三位置につい  
ている。

「大砲準備！」

頭領の声と共に、轟音が響き渡る。しかし、微妙な距離でかすりも  
しない。まるで砲を誘っておちよくっているようだ。

「頭領、旗信号です！」

「何をいつてきたんだい」

「……陛下を、嬢ちゃんを渡せと……」

海賊たちは固唾をのんでそのやりとりを聞いていたが、男の伝言を

聞いた頭領の顔に慄然とした。

「誰が渡すか！ 妹はわたしのものだ、全員戦闘位置に付け！ 皆殺しにしてやる！」

全身から怒りを発している頭領を初めて見た。近寄れば瞬殺される、そんな殺気すら放っていた。

いつも、穏やかで落ち着いている男が。

それでもリウヒを逃すのは、いまが一番いい機会かもしれない。いや、今しかない。

キジは近くにいたクロエと他二人の男の肩を掴んで小声で言った。

「リウヒを逃すのは、今しかない。お前ら頭領の注意を惹きつけてくれ。おれは部屋の鍵を開ける」

二人の男は了解した風に頷いたが、クロエは顔色を変えた。

「そんな、キジ！リウヒを逃がすなんて……」

「ならお前も一緒に行け」

「な……！」

「リウヒと宮へ戻るも、ここに残るのも、お前が考えて決めろ。いいな」

そして急ぎ、頭領の部屋に向かう。幸い頭領は後甲板で死角になって見えない所にいる。

扉の中からやたらに叩かれる音がした。

リウヒが宮廷海軍に気が付き、出ようと暴れているのだろう。

針金で鍵を開け、扉を開ける。と、椅子を振り上げたリウヒと目があつた。

「リウ……！うおおう、止まれ！ おれを殺すな！」

「キジ！」

どんがらがらがっしょんと椅子を放り出したリウヒは、そのまま抱きついてくる。

「キジ！ キジ！」

「馬鹿こら離せ！ 今そこどころじゃねえ！」

慌てて引き離そうとすると、後ろから痛い目線を感じた。

「キジ……。やっぱりお前……」

クロエが呆然としたように立っている。

ああああ、なんて間の悪い！

リウヒはよほど混乱しているのか、キジに抱きついたまま、泣きじやくっている。

ああー。泣きたいのはおれだよ、リウヒー。

「ああもう、馬鹿！ 馬鹿二人！ だから今は、それどころじゃねつつてんだろ！」

その声に、二人ははっとしたように、顔を上げた。リウヒもキジから離れた。

「ご、ごめん……。キジの顔みたら安心しちゃって……」

「仕方ないよな、怖かったんだろ」

キジの手が慰めるようにリウヒの頭を撫でる。

「だから、今は、それどころじゃあないんだろっ」

後ろでクロエがイライラした声を出した。

「そっだ、兄さまは」

「後甲板にいる。この辺は死角だから見えないけど……」

「どうやってあそこまで行くか」

リウヒが指を噛みながら彼方を見た。泳いで行くには遠すぎる。第

一この子、泳げるのか？

「泳げない」

「おれも」

あっさり二人は首を振る。

「じゃあ、小船を下ろしていくしかないな」

キジがため息をつきながら提案した。

「あれならなんとか……」

「なんの相談をしている」

キジたちはその声に、ビクリと身をすくめた。恐る恐る振り返ると、冷たい怒りの冷気を発している頭領の姿があった。後ろには男二人が、すまんというように手を合わせている。

「お前たちときたら……わたしは悲しいよ」

「頭領、この子は宮に帰るべきだ」

キジの声に、頭領の眉が上がる。

「それを決めるのはお前じゃない。わたしだ」

ゆっくりこちらに歩いてくる。当てられたように、足がすくんで恐怖がせりあがってくる。

「リウヒ。おいで。部屋に戻りなさい」

「嫌です」

低く落ち着いた声がした。

思わず、キジとクロエはその顔を見る。リウヒははつきりと兄の顔を見据えていた。

小型船が至近距離まで接近、と遠くから声がしたが、頭領は聞いてないようだった。

「我儘をいうんじゃない。部屋へ戻れ」

「嫌です」

いきなりリウヒは横へ駆けだした。そして手すりによじ登りそこに立ちあがってふんばった。

駆けよった頭領やキジたちを、静かに微笑んで見下ろしている。

風になびく髪や深紅の衣がゆっくりとはためいて、一瞬時間が止まったように感じた。

気品すら漂うその姿に、キジは感嘆した。なんてきれいなんだ。

きつとまわりのみなもそうだっただろう。その証拠に誰も動かない。

「リウヒ……危ないからおりなさい」

頭領の声がする。先程の怒りは欠片もなく、狼狽した声だった。

「兄さま」

「お前はどこに行く気だい……」

「約束破ってごめんなさい」

「一生わたしの横にいたと言ったじゃないか……」

「兄さま、さようなら」

沁みるような笑顔を残すと、そのまま後ろにゆっくり倒れた。

「リウヒ、リウヒ！」

兄の手は空を掴み、赤い衣が落ちてゆく。

キジが躊躇いもせず、身をひるがえしてその後を追った。落下してゆく娘を追いかけて。

あんの馬鹿！ 泳げなくせに、自分から海に落ちるんじゃないよ！ アナンもすぐさま手すりに足をかけたが、海賊たちに押さえつけられた。男たちが団子になって腕や足に飛びつき、甲板に引きずられるように戻された。

「離せ！ 離さないか！ リウヒが、リウヒが……！」  
もがき手すりへ行こうとする頭領を男たちは必死になって止める。

「頭領、嬢ちゃんは帰してやってください」

「あの子は帰るべき所がある」

口々に懇願しながら暴れる男を押さえつける。

アナンは絶叫した。まるで子供を殺された獣のような、悲痛な叫び声だった。

海中で長い髪がそよいでいる。宙に浮いているかのように、光の柱が射す中を闇へとゆっくりとおちてゆくリウヒを抱きしめ、キジは回転するように水を蹴った。

髪や衣が水を含んでいるのだろう、とてつもなく重い。藍色の髪がゆらゆらと漂って、まるで深海へ誘っているようだ。

眠るような白い顔を見ながら、ふと思った。

なあ、リウヒ。

深い海の中、一緒に沈んで海の藻屑となろうか。誰もいない静かな海底で。

朽ち果てた体は、海の一部になり消えてゆくに違いない。

それでも抱き合い一体となって、冷たい海の塵になればいい。

おれとお前の二人だけで。

誰にも邪魔をされずに二人だけで。

永遠にただ二人だけで。

その時、頭上に影がよぎった。宮廷小型船の黒い船底が見えている。正気に戻ったキジは、重い体を抱えて再び上を目指した。

馬鹿！ おれの馬鹿！ 今、何を考えていたんだ！

「大丈夫か！」

声をあげて水面から顔をだしたキジに、宮廷の小型船がよる。リウヒが引き上げられ、自分も助けられながら乗り込んだ。

「場所を開けてくれ！」

叫びながら意識を失った少女を仰向けに横たえる。不安定な小舟の上だが仕方がない、事態は一刻を争う。

「リウヒ。おい、リウヒ！ 起きろ！」

耳元で怒鳴っても何の反応もしない。顎を上を持ち上げて、呼吸を確かめたが息はなかった。

「ああ、畜生、死ぬなよ。死ぬんじゃないぞ」

小さな鼻をつまんで口に息を送りこみ、つましい胸の間を両手で何度も体重をかけて押す。

「お前あんどき、おれのおかげで目が覚めたって言ったじゃねえかよ。早く目を覚ませよ、覚ませ、馬鹿やろう！」

もう一度、同じ動作をして再び両手で押す。

「お前はあそこに戻らなきゃいけないんだろう。頼むから死なないでくれ。おれの前から消えないでくれ。おれを残していくな、そんなん許さねえぞ！」

瞬間、リウヒが、口から水を吐き出した。うつすら目を開ける。

「……ジは」

「気が付かれましたか、陛下！」

周りの男たちが声をあげた。

「キジはどこ？」

「ここにいる」

僅かに上がった白い手を、キジの手が浚うように掴みかき抱く。

「ここにいるから」

「キジ……」

安心するように微笑んだ。黒い瞳はまっすぐ自分を見つめている。よかった。本当によかった。生きていて。

「お前、いきなり飛びこむなよ……。泳げない癖に。驚かすんじゃないよ……」

声が震えているのが分かった。かがんで覗き込みながら、リウヒの顔に張り付いている藍色の髪をとってやる。

「でも、キジが助けてくれた」

その声はか細かったが、とても嬉しそうに聞こえた。

「ありがとう、キジ。……ねえ、キジ、泣いているの？」

「泣いてなんかねえよ、馬鹿。海水が目にしみているだけだ」

白さを通り越して、青くなっている頬を撫でる。リウヒは甘えるように目を細めた。

「お取り込み中失礼いたします、陛下」

突然、厳いかついおっさんがによっきりと顔を出してきて、キジは悲鳴をあげて身を引いた。

船は左將軍のいる中型船の近くまで来ており、そこに回収されるという。

「じゃあ、まずこいつを連れて行ってくれ。水をすつてもものすごく重いんだ」

「嫌だ、キジがいい」

「無茶言わないでくれよ、おれ、もう限界」

リウヒは口を尖らせて横を向いたが、そのまま眠るように意識を失った。

中型船の甲板に降り立つと、少女は沢山の人だかりに囲まれたまま運ばれて行った。

キジ一人がポツンと取り残される。当たり前だよな。王さまだものな。

遠くなるリウヒをほんやり見送っていると、人だかりの中から、銀髪  
の男がキジの方に走りよって、いきなり手をとった。

あまりの勢いにキジは仰天する。何この人、ちよっと怖い！ そんな  
目で見つめないで！

「陛下をあそこから連れ出してくれて、御命を救って頂いて心から  
感謝いたします」

「やめてくれよ。そんなんじゃない」

おれが助けたかったのは、陛下じゃねえよ。リウヒだ。

男は深々と礼をすると、駆けるように集団の中に戻って行った。

彼方を見る。物心ついた時から乗っていた海賊船は小さくなっていた。  
なんだか頼りないような風情で浪間に漂っている。

「本当にありがとうございました」

振り向くと、あの厳ついおっさんが立っていた。

「礼を言われるほどの事はしてねえよ」

それにあんまり感謝されすぎるのも、居心地悪いし。笑うとおっさ  
んは、横にたってキジと同じ方向に視線を向けた。

「もう一人、海に飛び込まれたようですが。ただ今、奥で休んでお  
ります」

クロエか。あいつも泳げないくせに。キジは小さく笑う。

「案内してくれないかな」

頷いてこちらです、と踵をかえすおっさんの後をいこうとして振り  
返る。海賊船はいつの間にか消えていた。

\*\*\*

目を開けると、いつの間にか知らない部屋にいた。ここはどこだ。  
もしかして、また夢なのか。たしか、海に飛び込んだところまでは  
覚えている。

ゆっくり起き上がると、目の前にカグラがいて驚いた。やっぱり夢？

「陛下」

カグラが嬉しそうに、手を取った。

「よかった、気が付かれて。二日間寝たままだったのです。このまま意識が戻らなかつたらどうしようかと……」

「カグラ？ 本当にカグラ？ これは夢じゃないの」

「現実ですよ」

どこからが現実で、どこからが夢なんだろう。

「今、船はティエンランに向かっています。アナンの船から海に飛び込んだあなたを、青年が助けてくれたのですよ。その方と、もう一方の青年も一緒に乗って……」

「キジとクロエも乗っているの？」

リウヒの勢いにカグラは驚いたように、目を開いた。

「キジは？ どこにいるの、ねえ！」

弾かれたように寝台を飛び降りた瞬間、クラクラした。

「ああ、まだ無理はできない体なのですから……」

それに今は深夜ですから、二人とも寝ています、と諭され、リウヒは不承不承頷いた。

「明後日にはスザクに着きますからね。それまではしっかり療養をしてください」

「はい」

大人しくこつくりと頷いて、リウヒは寝台に横になった。

「カグラは？」

「おそばにいます」

「それはいけない、カグラも休んで。今までちゃんと寝てなかったんでしょう、隈ができています」

「では、陛下が寝るのを見届けてから、部屋に戻ります」

「そう言われると、寝にくいな」

クツクツ笑って、枕に顔をうずめたリウヒだったが、すぐに寝息をたてはじめた。

船はすべらかに浪間をぬって、ティエンランへと向かっている。



## 再会

ティエンラン国のスザクの港に降り立ったクロエとキジは、リウヒの懇願もあつて共に宮廷へと行くことになった。カグラが用意した高級な絹の衣をまとい、馬に乗って。

絹なんて着たことがないというキジのその恰好を見たたん、リウヒとクロエは爆笑した。

「似合わないとは思っていたけど」

「ここまでだなんて」

ゲラゲラ笑う二人に、キジは地団駄を踏んで怒った。

「だから宮廷なんて、おれいきたくねんだよ！　なんだよ、この衣、まとわりついて気持ち悪い！」

「うそうそ。よく見るとカッコいいぞ」

「茶色の衣が橙の髪によく合っている」

「いいよ、もう」

ふてくされたように鼻を鳴らしたキジは、今度は馬に怯えた。

「おれ、馬のつたことねえよ」

「じゃあ、一緒に乗る？　ここ」

ポンポンと叩かれたのは、鞍の前だった。

「えー。リウヒの前かよー……」

「だって、わたしは手綱をとらなきゃいけないもの」

「なんか、女々しくて嫌だ」

「おれと一緒に乗るか？」

「えー……。クロエの前かよー。まあ、そっちの方がまだマシかも……」

なにそれ、ちょっと、どういう意味。と今度はリウヒが鼻を鳴らした。

「そろそろ行きますよ」

じゃれ合う三人を呆れたように見ていたカグラが声をかけた。

えっこらしよ、とキジがおっかなびつくりクロエの前に跨る。

「行こうか」

リウヒは手綱を巡らし胴を思い切り蹴った。馬は驚き、一声鳴いて走り出す。

「ああっ！ 陛下、走ったら目立つではないですか！」

カグラが慌ててその後を追う。

「行くぞ」

「ぎゃあ！」

クロエも胴を蹴ると、前のキジが悲鳴を上げた。速度を上げてリウヒたちを目指す。キジは最初、揺れる怖い気持ち悪い、とか、向かい風がきつ過ぎて鼻水がでる、とか喚いていたが、しばらくすると落ち着いたのだろう、奇妙な体勢で大人しく前をみるようになった。前方では、リウヒが馬を駆っている。藍色の髪が踊るように揺れていた。クロエは思わず見とれてしまう。

あの少女が、自分を見ていない事は、大分前から気が付いていた。その目が誰を追っているのかも。その声が誰を呼ぶのかも。

それでも諦めることはできない。仕方ないじゃないか、好きなんだから。

自分はもうあの船へ戻ることはないだろう。あんなに憧れていたアナンに対する憧憬は、きれいに消滅してしまった。

これからは、目前の国王陛下の為に尽くそう。たとえ、振り向いてもらえなくても。仕様がなしいじゃないか、好きなんだから。

「暴走娘」

馬首に張り付いたキジが笑う。その目はまっすぐリウヒを見ている。

ああ、そうか。お前もそうだったんだよな。

気が付いていたけど、気が付かない振りをしていたよ。

流れる風を全身に受けながら、クロエはひっそりと痛々しく笑った。

\*\*\*

風に髪をなびかせながら、リウヒはただひたすら馬を駆け宮廷を目指す。かつて海賊たちと民を率いて通った道を。大好きな仲間と共に通った道を。

風景は次から次へと後ろへ流れてゆく。

そんなに飛ばしたら馬がばてる、もう少し速度を落とせとカグラの声がしたが、無視した。

だって早く帰りたい。みんながいるあの場所へ。わたしの居場所へ。カグラは、あの船での出来事を一切聞いてこなかった。

「なにも言わないんだな」

宮廷海軍の甲板で、二人で間近にせまる陸地を見ていた時に言うと白將軍は片眉を上げた。

「なにか言ってほしいのですか？ 慰めの言葉をご所望ですか。それとも諷める言葉がほしいのですか」

思わずその顔をみると、見たことのないような厳しい表情をしていた。

「あの船ではさぞかし壮絶な事があったのでしょう。きっとそれは、あなたを苦しめることにもなると思います。一生付きまとうでしょうね。悪夢に悩まされることだってある」

「うん」

目線を海に戻す。

軍に守られた今でさえ、兄が追ってくる恐怖がある。捕まって、あの部屋に閉じ込められて足を切断される夢にうなされた。楽になりたいあまり、王としての責任を忘れた事も、兄に身を任せた後悔も、怒涛のように押し寄せる。呼吸が苦しくなるほど、つらかった。

「しかしそれは、大なり小なりみながつ持っているものです。闇の部

分をね。それでも生きていかなければならない」

リウヒは再び顔をあげて、カグラを見た。この男も、闇を背負っているのだろうか。

「けれども、わたくしたちがおりますから」

カグラが表情を緩めて、リウヒの頭をくしゃくしゃと撫でた。

「黒將軍をはじめ、みなは大層心配しておりましたよ。早くその元氣な姿をみせてあげなさい」

「ぜ……絶対、何か言われるだろうな……」

不安そうなりウヒの頭はさらにくしゃくしゃと掻きまわされる。

「安堵の裏返しです。喜んで受けるべきじゃないですか」

えー。と声をあげるリウヒにカグラが笑った。

馬は汗をかき始めたが、足を緩めない。後ろを振り返ると、むっつり黙った白將軍とクロエの馬が見えた。キジが奇妙な恰好で馬に張り付いている。笑ってしまった。

「なんだよ、笑うなよ！」

となり声が聞こえた。

宮廷が見えてきた。陽光を受けて燦然と輝がやいている。

ティエンランが誇る天の宮。

わたしの愛する天の宮。

大階段前で馬を乗り捨てると、リウヒは駆けるように階段をのぼりはじめた。裾が絡まって足がもつれる。気は急ぐ。勢いよく両手で裾をからげると、段飛ばしで飛ぶように駆け上がった。

もう、正門があんなに遠い。だれだ、こんな階段を作ったやつは。目指す門の下では、みんなが待っているのが見えた。

トモキ、シラギ、マイム、キャラ。ごめんね、遅くなって。ただいま。

ああ、わたしの居場所。光に包まれて、温かい空気の流れるわたしの大切な居場所。

「リウヒさま！」

駆けよろうとするトモキを突き飛ばして、シラギがリウヒをしつかりと抱きしめた。

「御無事で……」

「ごめんね、心配かけて」

「御無事で……！」

さらに力を込められ、息が詰まった。

「シラギ、苦しい……うげぼっ」

「ずるーい、シラギさん。あたしも、あたしも」

黒い衣をポコポコたたきながら、キャラが口を尖らせる。

「やりすぎよー。ねえ、リウヒが白目剥いているじゃないの」

マイムがシラギの髪を引っ張る。

「ひどいじゃないですか、手をすりむいて……。シラギさま、リウヒさまを離してください！ 死にかけています！」

やっと緩まった腕に息を吹き返したリウヒは、咳きこんだ。みんながシラギを責めている。声をあげて笑った。本当に帰って来たんだ。

「心配かけてごめんね、みんな。ただいま」

一斉に上がるみんなの言葉は、絡まって何をいつているのだから分からない。

シラギはリウヒを離さず、そのまま崩れたように膝を折ると静かに涙を流し始めた。

「シ、シラギ？」

仰天してうつたえるリウヒよりも、世にも珍しいものをみた三人は、マジマジと黒衣の男を凝視している。

「腹の上で、男を泣かす事ができたら一人前よねー」

「マイムさん、それ、深いですね」

感心したようなマイムに、キャラが頷いている。トモキはただオロオロしているだけだ。

「ど、どうしよう……」

本気で困ってしまったリウヒに、口付けでもしてあげれば？ 抱き

しめてあげれば？　いつそ投げ飛ばしてしまえば？　と無責任な声が飛んでくる。

そこにカグラたちがやっと追き

「陛下、あの階段の駆け上がりはさすがに……。何をしているので」

異様な光景をみて目を点にした。後ろにいるクロエとキジもぼかんとしている。

「シラギが感極まっちゃって大変なのよ」

「リウヒの盛り上がりがいまいち足りないのが、ちょっとね」  
明らかに面白がっている女二人。

カグラはため息をつく、リウヒからシラギを引っぺがした。

「すまない、取り乱してしまった」

「ところで、なにこの可愛い男の子たち」

マイムに可愛い男の子扱いされたクロエとキジは、再びぼかんとしていた。

「ああ、わたしの命の恩人だ。キジとクロエ。クロエはシラギの又従弟だそうだ」

来て、とりウヒは二人の手を取りひっぱってゆく。

慌てたように二人が礼をすると、キアラが歓声を上げた。

「すごい、クロエさん、シラギさんにそっくり！」

「本当だ。小さなシラギさまですね」

トモキの声にみなが笑う。苦りきったシラギと戸惑ったようなクロエ。

その後をリウヒはよくは覚えていない。気が付けば、東宮のいつもの寝台の上で横になっており、心配そうなトモキの顔が見えた。

「兄ちゃん」

手を伸ばすと、トモキが握ってくれる。さらりとした温かい手は、とても安心した。

「心配掛けてごめんね」

トモキはただ静かに笑って、もう一片の手で優しくリウヒの頭を撫

でた。

ここがわたしの大切な場所。そしてキジもいる。

トロトロとリウヒはまどろみの中に落ちた。幸せそうな顔をして。

## 違和

寝れねえ。

絹の掛布や寝着は柔らか過ぎて、どうも肌に馴染まない。

キジは舌打ちして起き上がった。

あてがわれた客室は、壁は細かい刺繍がどこされているし、家具は高級で落ち着かないし、大体、なんで寝台の上から布がたれさがっているのだ。そこにすらも刺繍が施されている。この人間のしやべり方にもなれない。どうも体がむず痒くなってしまう。

リウヒと共に宮廷にきて数日が経った。

王は公には病気という事になっていたらしい。公にはってなんだよ、と思ったが、上になればなるほど、表と裏ができてくるのだろう。

そりゃそうだよな、一国の王が海賊に攫われてしまいましたー、なんて公表できないもん。

だけど、本当にあの子は王さまだったんだ。

宮に帰った翌日、朝議にキジとクロエも連れて行かれた。そこでキジは愕然とした。

おっさんやじいさんたちが、深々と頭を下げる中、小さな冠を藍色の頭にのせ、見た事もないきれいな衣を纏ったリウヒが厳かに進んでいく。そして一段と高い、高級そうな椅子に座った。

「面を上げよ」

おっさんたちが顔を上げると、低く静かな声で話し始める。だけでも、キジの耳には全く入ってこなかった。船でつるんでいた時や、水かけ合戦の時のような、生き生きと笑っていた少女の面影は全くなかった。国を預かる責任をもった顔だった。

まるで別人だ。本当に、お前は王さまだったんだな。

それは住む世界が違う、という事実で横面を殴られたような衝撃だった。

クロエはもともとここで育った人間だ。呼吸するように馴染んでい

た。今度は自分そっくりの又従兄と火花を散らし合っているらしい。当のリウヒは夜な夜なキジの部屋にやってくる。酒瓶を片手に窓から。

「なんで窓からくるんだよ」

「あれから目付がきびしくなっちゃって」

「帰れ」

「そんなこといいの？」

ふつつつつ。いやらしく笑いながら酒瓶を取り出す。

「これが目に入らぬか！」

「うっ！それは幻の高級酒イゾー・モリ！」

結局は部屋に上げてしまう。

ヘラヘラ笑っているリウヒは、王さまでなくていつもの少女に戻っていて、ホツとする。

「大丈夫かよ、また、かつ浚われないように警備もきびしくなってるだろう。その本人がフラフラと」

「大丈夫、大丈夫。キジの部屋に行ってきますって書置きしてきているから」

そして血相変えて迎えにきた、シラギやトモキに引きずられて帰ってゆく。

トモキという男は見覚えがあった。以前、同じ船に乗っていた時に世話をしたことがある。本人も覚えていてくれた。気持ちのいい男で、リウヒさまを助けていただいて、ありがとうございましたと深々と頭を下げた。そして、部屋に招いてくれた。

居心地の良い部屋で、色々な話をした。それでも住む世界が違うという違和感は拭えなかった。もし状況が違えば、いい友達になっていたのかもしれない。

外にでると、ひんやりした冷気が頬を撫でた。

遠くに城下の灯りがひっそりと瞬いている。町はもう寝入っているのだろう。静かだ。

風がゆるやかに吹いている。目を閉じて思い切り吸ってみても、微

かに花の香りがするだけだった。

磯の香りが恋しい。体を駆け抜ける風が、踊るように歌う波の音が。キジはしばらくそのまま目を閉じていたが、ゆっくり目を開けると部屋に戻った。

翌日、朝餉を持ってきた女官にリウヒに会いたい旨を伝えた。

\*\*\*

酒を持ってきた女官が下がると、マイムが杯を満たしてくれた。

「お疲れさま。そしておめでとう。今回の事で海軍は随分と株があがったんじゃないの」

「わたくしは己の仕事を片付けただけですけれどもね」

返杯しながら言うと、金髪の恋人は胡散臭そうな目線を向けた。

「あんた、変わったわね……。なんだか気持ち悪い……」

「おかげで、予算も取りやすくなった」

元王子に感謝、と杯を掲げると、マイムは吹き出した。

「前言撤回、やっぱりあんたはあんただわ」

それでも、ほとんど綱渡りのような救出劇だった。リウヒが海に飛びこまなければ、あのキジという青年がリウヒを助けてくれなければ、どうなっていたらだろうか。

「あの子は……あの子たちは、どうなるのかしら」

「どうもならないでしょう」

リウヒを助けたキジは、小舟の上で必死になって娘の意識を呼び覚ました。

目を覚ませ、おれを置いていくな。そして目覚めたりウヒは、ただただ、キジしか見えていなかった。周りの者たちは、なにも言えなかったし入れなかった。唯一ジャコウを除いて。その中年男は、遠い目をしてカグラに語った。

「あの時のお二人には、感動いたしました。まるで昔の自分を……。あ、いえ、ゴホゲホ」

最後は咳払いで誤魔化された。

カグラの目の前で、目を開けたリウヒは、すぐさまキジの元へ向かうとした。

国王である少女と海賊である青年は、間違いなく惹かれあっている。だが、しかし。

「ぜひあなたを海軍へむかえたいのですが」

「やめてくれよ。宮仕えなんてがらじゃねえ。それに生まれ育った船や仲間を裏切りたくねえんだ」

喉から手が出るほど欲しい人材だったが、リウヒをダシにしても、キジは首を縦に振らなかった。

あの男はその内、アナンの船に帰っていくだろう。

「シラギの意外な一面も見られたし」

クスクスと思いい出し笑いをするマイムにつられてカグラも笑った。帰ってきた愛しい少女をうっかり抱き殺すところだった黒將軍は、今度は部屋に戻ろうとしたカグラを抱きしめた。

「感謝する」

リウヒを取り戻してくれて。

男になんぞに抱きしめられたことのなかったカグラは目を白黒させて狼狽した。丁度、横にいたマイムも凍り付いていた。

しかし、胸の内に温かい感情が湧いてきたのも否めなかった。生まれてからこのかた、友人など持ったことのなかった二人が、初めて心を通わせた、そんな感じがした。

「あのときのあんたらは見ものだったけど、ちょっとうらやましかったな」

友達っていいものね。マイムが微笑んでカグラの座っている椅子の肘かけに腰をかけた。

そのままゆっくり銀髪を梳いてゆく。

「それでどうなさるの、白將軍さま。海軍は強くなるの？」

「当たり前」

まろやかにくびれた腰に手を回した。

「女を育てると思えばいいのです。軟弱でやる気のない小娘の尻を叩いて、この近辺に名を知られるほどの美女に育て上げてみせますよ」

「あんたって、本当に……」

マイムは笑いながら、銀髪を引っ張った。カグラが痛みに顔を顰める。

「変わらないのね」

## 別れ

リウヒは色を変えてゆく夕暮れの空と城下を、東宮の小庭園から眺めていた。もうすぐキジが来る。

心臓が小さく跳ねまくって、止まらない。祭りか。祭り状態か、わたしの心臓は。

ああ、簪は曲がっていないだろうか、襟はちゃんと抜けているだろうか。

そわそわと確認するように、手をあちこちへとやる。

が、ときめく感情とは裏腹に、心の隅っこは冷静だった。キジが言うだろう言葉も検討が付いていた。言ってほしくない、でもあの男は絶対そう言うに違いない。

「ごめんな、時間とらせちゃって」

「キジ！」

女官に案内されたキジが、頭をかきながらやってきた。女官はそのまま下がってゆく。

「居心地のいい場所だな」

「うん、気に入ってるんだ。眺めもいい」

ここから見えるティエンランの城下と、その先に広がる草原、山、そして端に見える海の光景をリウヒは愛していた。

「本当だ。すげえ」

風が緩やかに吹いて、簪の飾りが小さく鳴く。

「警備の者とかいないのか。やけに静かじゃねえか」

「人払いしてある。押し倒してくれてもいいぞ」

「するか馬鹿」

存分に本気を込めた冗談は軽く一蹴された。しばらく二人で並んで城下を見下ろしていた。

「おれさ」

キジがぼつんと言った。

「海に戻るよ」

ああ。リウヒは目を閉じた。ああ、やっぱり。冷たい悲しみが足の先から這い上がって、体を侵食していくのが分かる。

「頭領がまた受け入れてくれるか分かんないけど、まあ、その時は他の船に乗るか、漁師にでもなつてさ」

その声は笑いを含んでいて、とても楽しそうに聞こえる。腹が立った。

わたしはこんなに悲しいというのに、ひどい男。でも泣いて縋るのは嫌だった。

分かっている。

「キジの居場所は、あの海原の彼方なんだな」

「ああ。山でもねえ、宮廷でもねえ、海がおれの住処だ」

「いけないで」

願望が勝手に口について出てきた。キジに向き直って、その顔に手が伸びる。

駄目だ、止まらない。

「いけないで」

お願いだから、いけないで。わたしの前からいなくならないで。だって。

「わたしは、わたしはキジが、好……」

「それは違う」

キジが、差しのべられたリウヒの白い手を取った。黒い瞳を覗き込む。

「お前はさ、あの異様な状況の中で縋るものがほしかったんだよ」  
今まで、大切に育てられて来たんだろう？ 怒鳴られた事も、はたかたした事もなかったんだろう？ だから、びっくりして勘違いしたんだよ。まるでヒヨコが初めて見るものを母親と思いこむように、おれを特別視した。そうしてくれる人だったら、きっと、おれじゃなくてもよかったんだ。

お前は弱つちい女だからな。

沁みるような笑顔を浮かべて、キジの視線はリウヒの瞳から、その手へと移った。

「勝手にわたしを決めつけないで！ わたしはキジが好き、理由はどうだっていい、キジが大好きなの！」

涙があふれてくる。泣いて縋るのは嫌だったのに。笑顔で見送りたかったのに。

キジは何も答えてくれなかった。黙って自分の手をリウヒの手に絡ませたままだ。それが答えなのだろう。

「小さな手だな」

自分の白くて頼りない手を、キジの日に焼けたゴツゴツした手が愛撫する。

節くれたキジの手を、リウヒは涙を滴らせながら見ていた。縋るように絡みつく自分の手と、それを包み込むように優しく絡まる男の手。踊るように纏れる白い指と茶色い指。

「一つ、頼みがある」

「なに？」

リウヒが濡れた顔を上げた。

「おれの名前を呼んでくれないか。お前のその声で」

「キジ……」

「もう一回」

節くれた指が華奢な指を撫でる。

「キジ」

「もう一回」

白い手を茶色い指の腹が這ってゆく。

「キジ！」

抱きつこうとしたリウヒの体を、キジの腕が浚い抱きしめる。噛みつくように口づけをされた。貪るように応ずる。何度も何度も深く。激流のような愛おしさに翻弄される。

ねえ、キジ。

薄紅色の黄昏の中、一緒に溶けて空の塵となろうか。誰もいない静かな夕暮れ時に。

肉体は消えても、意識の一部は残るに違いない。だってこんなにあなたが愛おしいもの。

そのまま、戯れるように一体となって、天に昇って西へ行こう。

わたしとあなたの二人だけで。

誰にも邪魔をされずに二人だけで。

永遠にただ二人だけで。

キジの唇が離れた。

現実に戻ったリウヒの頬に涙が伝う。何を考えていたんだろう、わたしは。だけど、願うだけならいいじゃないか。せめて願うだけなら。

縋る自分の唇と体を、キジは静かに引き離してゆく。そして再び白い手を取った。

「ありがとう、リウヒ。お前がおれの人生の中にいてくれてよかった」

「キジ……」

このまま、わたしを残して去っていくのならば、一緒についてゆきたい。

海原の彼方へ。

でも、それは叶わない。王だから。ティエンラン国の王だから。誰も肩代わりできない、わたし一人にしかできない。恋する男について行く事もできない。

なんて不自由なんだろう。だが、それを選んだのはわたし自身だ。

自ら国を、大義を背負った。全てをかなぐり捨てて、ここを出て行く事はできない。大義を果たす責任があるから。

キジの片方の手が伸びて、自分の涙をぬぐった。

「強くなれよ、リウヒ。そしてこの国を守れ」

ああ、大好きな男の顔。大好きな男の手。大好きな男の言葉。  
リウヒが頷くと、キジは手を離れた。白い手から、ゆっくり茶色の  
手が引き抜かれてゆく。完全に離れても、白い手は中に浮いたまま  
だった。  
一度も振り返らずに遠ざかってゆく男の背中を、リウヒは黙って涙  
を流しながら見ていた。その姿が消えても動かなかった。  
夜のとばりがおりて、辺りが闇に包まれ始める。星たちが控えめに  
瞬き始めた時、リウヒは嗚咽をあげてうずくまった。

\*\*\*

まだ星の残る早朝、大門下。クロエは海へと旅立つ親友を、見送り  
についてきた。  
二人だけだ。リウヒはいなかったが、キジは別れはもう言ったから  
と笑った。

「なあ、本当にいくのか」  
戸惑ったままのクロエに、キジが頭をかく。  
「そんなこと、この恰好をしているおれを見て言われても」  
粗末な綿の衣に、水筒や弁当をいれた風呂敷。

「本当にここを出て行くのか」  
「今、その状態だろ」  
「なんで出て行くんだ。」

「だって、リウヒはお前を……。お前もリウヒを……」  
涙がポロポロと流れます。おれが恋した女は、お前が好きなんだぞ。  
お前だってリウヒが好きなんだろ。どうして出て行くんだ。  
「お前、朝っぱらから酔ってんの？ それとも素で泣き上戸？」  
「からかうように言ってクロエの頭をワシワシとかきまわす。」

「人間な」

手が離れた。

「色恋沙汰がすべてじゃねえんだ」

クロエは顔を上げた。キジの顔からなんの表情も読み取れない。本気でそう思っているのか、自分に言い聞かせているのか。それでも不承不承頷いた。

「……そうだ、これ白將軍さまから預かっていたんだ。キジに渡し  
てくれって」

ずっしりとした袋を渡す。

「なにこれ、重っ！」

「金三十」

はい、とキジがその渡した袋をクロエに差し出した。思わず素直に受け取ってしまう。

「いらね」

「キジ！ 金は大切だって、お前が教えてくれたことだろう！」

叫ぶとキジは鼻を鳴らした。

「おれが助けたのは、国王陛下じゃなくてリウヒだ。だからいらねえ。その金は、そうだな。弱小海軍の資金にでもしてくれ」

理由になってない。クロエはため息をついた。

一年間、ほとんど一緒に過ごした親友。共に酒を飲み、商船を襲い、嵐の中で走り回って、青空の下で笑い合って、同じ女に恋をした大切な親友。

ティエンランの宮廷は、愛すべき国王を浚った海賊船を憎んでいる。特に海軍はそれが顕著で「追いつけ追い越せ打倒アナン」を合言葉に団結力を深めている。そして、あの元王子がまた大切な国王を誘拐しないとは限らないし、当の船は当てつけの如く、ティエンラン周辺を荒らし回っている。左將軍は、そこを強調して多額の予算をふんだくった。これから海軍は発展していくことだろう。海の知識がありその船に乗っていた自分も、勿論組み込まれている。

そして目の前の親友は再び、アナンの船に帰るという。次に会うときは、敵同士かもしれない。もう会えないかもしれない。それでも

キジは笑った。

「人生長いんだ。またいつか会えるさ」

「そうだな」

クロエも笑った。

「その時まで元気で」

「お前もな」

肩をたたき合って、キジが離れる。

一度も振り返らずに遠ざかってゆく親友の背中を、クロエは黙って見送っていた。

悲しくも寂しくもなかった。またいつか会えるさ。そう思っていたから。

しかし二人が会うことは、生涯二度となかった。

## 海原の彼方

「一度、休憩しますか」

「そうだな……」

男の言葉に老人は呟いた後、す……と目を閉じた。

「あーじいちゃん、また寝ちゃったー」

「最近すぐ寝んだよなー」

周りに群がっていた子供たちが声を上げる。

——寝たんじゃねえぞ。おれはここにいます。

キジの意識は、子供たちの上を浮遊しながら声をかけたが、誰も気が付かなかった。

日当たりのいい部屋の一室で老人が、揺椅子に座り目をつぶっている。その周りに数人の子供たちが取り囲んでいて、一人、男が座っていた。変わった髪形をしていた。天辺は無毛で両側に生えている銀髪を伸ばして無理やり中央に集めて括っている。丸い愛嬌のある体つきで、手には紙と羽ペンを持って何か書いている。

「ごめんな、スガタさん。うちのじいちゃん、一回寝るとなかなか起きねんだ」

「いやいや、キジさんに無理を言って話してもらっているのは、ぼくだしね」

そうだ。おれはこの男に、昔の話をしているところだった。遠い遠い昔の話。

老人になっている自分を改めて観察する。

まー。こんなハゲ散らかして、皺だらけになっちゃって。だけど、いい顔しているな。おれ。いい人生を送って、満足きった顔だ。階下から、おやつよー、と声がしてチビたちが歓声をあげて移動する。丸い男も手を引かれて降りて行った。キジの意識もついてゆく。

「あら、じいちゃんは？」

「寝ちゃったんだよ。気持ちよくしゃべっていたのに」

子供たちはプイプイと文句を上げながら、白くて丸い物体を匙で掬って食べている。

「すいませんね。話の途中だったんでしょう」

「とんでもない。有難いお話でした。ティエンランと、亡き女王リウヒにまつわる話を集めているんですが、これは公にはされていないかったです。聞かせてもらって本当に良かったです」

ぼくの両親も話してくれなかったから、と男は笑った。居間で数人の大人たちが、茶をすすりながら声をかける。

「よかったら、おれらが親父から聞いた話もしょうか」

「怒涛の人生だったしな。ネタはつきねえよ」

ぜひお願いします。男は喜々とした声を上げた。

「じいちゃんはさー。リウヒが好きだったのかな」

少年が匙を舐めながら言うと、少女たちが鼻で笑った。

「当たり前じゃない、ベタボレだったわよ」

キジの意識はクツクツ笑う。

そうだよ。まったくその通りだ。

惚れていたんだ。滅茶苦茶に惚れていた。あの藍色の髪の少女に。

なあ、リウヒ。お前は知らないだろう。

あの宮廷の庭で、おれが内心どれだけ葛藤していたかを。

本当は、おれと一緒に来てくれと言いたかった。おれだけのものになつてくれと言いたかった。お前を愛していると叫びたかった。

でも、言えなかった。お前を困らすことが分かっていたから。無理だと分かっていたから。

あの細い体を、あの柔らかな唇を、あの小さな白い手を、離すことしかできなかったんだ。

今ではそれで良かったと思っている。

お前はお前の人生を生きたし、おれはおれの人生を生きた。

それでもあの時、浚ってしまえばよかったと何度も後悔したもんだ。おれが初めて本気で愛した女は、国王陛下だった。巨大な大義を背負った、自由のない女だった。そしておれは海でしか生きることの

できない男だった。

チビどもがきやいきやいとはしゃいで走りまわっている。

それを諷めながら、大人たちはのんびり語り出す。太った老婆がニコニコと聞いている。

思わず笑みが漏れた。

現実だって中々悪くはない。昔の美しい思い出はそのままに、長年連れ添って来てくれた妻や子供、孫たちはリウヒ同等、愛おしい存在だ。

おれの大切な家族たち。百年も二百年も栄えよなんて言わない。ただ、いつまでも健やかで幸せであってくれ。  
じゃあな。

意識は天に導かれるまま、西へ西へと走ってゆく。潮の香りがした。風が駆け抜ける、波の音が踊るように歌う。

ああ。キジは思わず歓喜の声を上げた。

遙かに広がる大海原。果てしなく遠い地平線。どこまでも跳ねる波間の輝き。

その先に光が見える。意識は更に加速した。

光の中に、みながいた。頭領やハルさんや、かつての仲間たちがこちらを向いて笑っている。なんだよ、リウヒもいるじゃねえか。そんな可愛い顔して笑うなよ。

みんなあの頃のままだ。

後ろからの気配を感じ、振り返るとクロエがいた。

おう、お前も来たのかよ。会ったら文句ゆってやろうと思っていたんだ。左將軍になって、さんざおれらを追い回しやがって。

まあまあ、その話は向こうでしようぜ。

クロエは笑って彼方を見る。

キジ、クロエ、早く。

リウヒが笑いながら、手を振っている。

横の馬鹿は、相変わらず恋する男の顔だ。おれもそうなんだろうな、

きつと。

いこうか。いこう。

そして二人は走り出す。海原の彼方へと。

窓の外では、海面が光をうけてキラキラと輝いている。うららかな冬の日差しが差し込み、揺椅子に座る老人を照らした。

口元に笑みを浮かべているその顔は、まるで寝ているようであった。

## 海原の彼方（後書き）

ここまでお読みいただきありがとうございます。

最初は脇役だったキジがどんどん他を掻き分け、下克上になってしまったこの小説。しかも未練たらたらで三巻にも生まれ変わりとして登場します。

リウヒとは一千年後に結ばれるのですが、また三巻の「時空の果てへ」もお付き合いいただければ幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1459r/>

---

海原の彼方

2011年5月10日12時55分発行